

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 喜界島方言の格の体系

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002430">https://doi.org/10.15084/00002430</a>

# 喜界島方言の格の体系

下地賀代子

## 1 はじめに

喜界島方言の格形式は、現代日本語共通語と同じく、名詞(語幹)に格助辞が後接する膠着の手続きをとって現れる。本稿では、2010年9月9日から15日の合同調査で得られた「文法」担当の各班の調査結果<sup>1</sup>をもとに、喜界島各地の格体系の概要を示していく。文法班が調査を行った地域は、小野津・志戸桶・上嘉鉄・中里・荒木の5つである。以下、それぞれの地域の格形式とその基本的な用法を示し、全体の比較を試みる。なお、各用例の数字は本報告書「データ集」の「文法データ」に対応している。また方言の表記および標準語訳も、断りのない限り「データ集」に同じである。

## 2 喜界島各地方言の格形式

### 2.1 小野津

小野津方言には以下の11の格形式と2つの周辺的な形式がみとめられる。

#### 2.1.1 $\eta$ a格<sup>2</sup>

(1)述語のさししめす動作、変化、状態の主体をあらわす。主節だけでなく従属節にも現れることができる(6811、3111)。

1811 maççirusun tu $\eta$ a, {sura/tin}joba tudui. 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」

1711 kin<sup>h</sup>u:ja k<sup>h</sup>u:jukka haz $\eta$ a tsusataja:. 「きのうは今日より風が強かった。」

5311  $\phi$ uzu ʔituk $\eta$ a t $\epsilon$ u:gakko:nu çinse:n<sup>h</sup>i natan{t $\epsilon$ i/do:}. 「去年いとこが中学の先生になった。」

1911 ʔan jaman<sup>h</sup>je: ʔinoçiči $\eta$ a ʔunti:do:. 「あの山にはいのししがいるそうだ。」

6811 ʔičasama $\eta$ a k<sup>h</sup>uritanu suijoba numiba no:juddo. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」

3111 n<sup>h</sup>imotsu $\eta$ a ʔubussatannati, t<sup>h</sup>aizi mutt $\epsilon$ ando:. 「荷物が重かったので、二人でもった。」

また、疑問詞疑問文やそれに答える文における焦点標示の用法—いわゆる〈総記〉—もみとめられる。

- 0611 ɖuriŋa da:(nu) hasajo. 「どれがおまえの筈だ。」  
 0711 ɸunu hasaŋa wa: mundɕa. 「その傘がおれのだ。」  
 0211 daŋa {h/ɸ}ate:kai ?iki. 「おまえが畑へ行け。」  
 0313 ?in, hate:kae: waŋa ?ikʲui. 「うん、畑へはおれが行く。」

(2)感情や能力の対象をあらわす。

- 3413 mago:ja kʷaɕiŋa suki. 「孫はお菓子が好きだ。」  
 4011 wano: to:nu saɕimiŋa kanbusa(ja:). 「おれは蛸のさしみが食べたい。」  
 5411 ?ituko: jeigonu honŋa jumi dikʲundo:. 「いここは英語の本が読める。」<sup>3</sup>

## 2. 1. 2 nu 格

(1)あとに続く名詞句を修飾する連体修飾語となり、その属性や関係するものをあらわす。なお、nu 格をとる名詞(句)は、一部の人称代名詞を除き(2.1.3 参照)、制限されていない。

- 1613 ?itukunu ?uduŋa janpija:nʲi ɸutɕi ?ai. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」  
 4111 daja ɸun ?ijunu na:joba ɕittɕunja. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」  
 7011 mitɕidzi gakkoku:nu ɕinse:nʲi ?o:tando:. 「道で学校の先生に会った。」  
 6514 ju:we:nu {duke:/dukinʲe:} ?anma:gari ?udutan do:. 「お祝いのときにはばあさんま  
 でおどった。」

また nu 格は「NP1-nu NP2」で用いられるのが基本であり、現代日本共通語にみられる形式名詞的な「の」(ex. 「それは私のだ。»)に相当する用法—「NP1-nu~」—は許容されにくいようである<sup>4</sup>。以下の用例では( )に例文の逐語訳を記す。

- 0511 ɸunu kama: taro:nu munna. 「この鎌は太郎のか。」(その鎌は太郎のものか。)  
 0913 hure: ?uttu:nu munkamu ɕirira:. 「それはおとうとのかもしれない。」(それはおとうとのものかもしれない。)  
 6312 hunu ɕinbuno kʲu:nu mun ɕa. kinʲu:nu muno: huri{ɕa/do:} 「その新聞はきょうの  
 だ。昨日のはこれだ。」(その新聞は今日のものだ。昨日のものはそれだ。)

(2)主節主語となる。現在の小野津方言の ŋa 格と nu 格は役割分化(主格と属格)の過程にあるようであり、話者によっては両形式の間にゆれがみとめられる(1411、1511 など)。

- 1411 {mitɕiŋa ɕirusaija:/ mitɕinu ?ubisaja:}. 「道が広いなあ。」  
 1413 mitɕinu ɕu:sa:nu:kka. 「道が広いなあ。」  
 3313 ?okina:nʲe: mittasanu kʷaɕinu ?ai. 「沖縄にはめずらしい菓子がある。」  
 1511 ?a, ?amri{ŋa/nu} ɸutittɕa. 「あ、雨がふってきた。」

従属節主語にも **-nu** は現れているが、ここでも **-ŋa** とのゆれが見られる (cf.6413)。

2211 ?anu mi:nu ?ubisanu ?irunu ?irusanu jinŋa: tarukaja:。「あの目のおおきい、色の白い男はだれだろう。」

6411 ?amɪnu φujunte:, ?anmaja ja:zi terebibakkai mitçundo:。「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

cf. 6413 ?amɪŋa hujun pe: ?anmaja ja:zi terebibe: mitçui:。「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

## 2. 1. 3 Ø 格

(1)述語のさししめす動作の直接的な対象をあらわす。なお同様の用法は 2.1.4 の **jo:ba** 格にもみとめられ、小野津方言ではその形式で現れている場合が多く、ゆれも見られる。

6212 wano: kin'u:ja çinbun jomanti:。「おれはきのうは新聞をよまなかった。」

3713 ?azija ?asakara ?umikai ?iju tunn'a ?izi:。「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

7112 nu: ho:ro:ka:。「なにを買おうか。」

4114 daja {φun/φunu} ?iunu namai çittçun n'a:。「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」

3714 ?aɕija ?asakara ?umik(?)ai {?iu/?iujo:ba} tunn'a {?iɕi/?iɕan do:}。「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす (場所名詞)。この用法も **jo:ba** 格を用いるほうが普通のものであり、Ø 格の用例は少ない。

1211 ku:ko: ?ariba φumanu {mitçi ?ikijo:/mitçioba ?izi tabo:ri}。「空港ならこっちの道を  
行きなさい。」

(3)人称代名詞のうち、1人称代名詞、2人称代名詞 (単数) は連体修飾語となるのに、**nu** 格ではなく Ø 格形式をとる<sup>5</sup>。また、連体修飾語となる **nu** 格の場合と同じく、Ø 格でも形式名詞的な「の」に相当する用法はみとめられていない (0711、0811 \*()) は例文の逐語訳)。

0411 wa: k<sup>2</sup>we:ja ɕa:n<sup>2</sup>i ?ai:。「おれの鍬はどこにある。」

0711 φunu hasaŋa wa: munɕa:。「その傘がおれのだ。」(その傘がおれのものだ。)

4611 wanna: ja:nu ?azija se:mu tabakumu numan(do:):。「うちのじいさんは酒もたばこものまない。」

0613 zurija da: hasa do:。「どれがおまえの筈だ。」

0811 φunu φuruçike: da: munna:。「そのふろしきはおまえのか。」(そのふろしきはおまえ

のものか。)

話者によっては Ø 格ではなく nu 格が用いられることもあるようである。

cf. 0413 wannu φe:ja za:n'i ?akka. 「おれの鍬はどこにある。」

0611 ɕuriŋa da:(nu) hasajo. 「どれがおまえの筈だ。」

また、時間名詞の Ø 格形式が連体修飾語となっている用例が 1 例現れた。

6311 φun ɕinbuno: k'ju:(nu) munɕa. kin'ju: muno: φuriza. 「その新聞はきょうのだ。昨日のはこれだ。」(その新聞は今日(の)ものだ。昨日のものはそれだ。)

## 2. 1. 4 jo:ba 格<sup>6</sup>

(1)述語のさししめす動作の直接的な対象をあらわす。既に述べたように小野津方言では、Ø 格よりも jo:ba 格のほうが多く用いられる。

3613 mago:ja manzu:jo:ba ha:be: kam'UN. 「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

7214 kazukonutu t'itsu ?assa:jo:ba hanakon'imu ho:ti {kuriro:/kuriranba ja:}. 「和子のおなじ げたを花子にもかってやろう。」

3011 ɕiro:, kun nimutsuoba hakkiti ja:gari ?izi kuriri. 「次郎、この荷物を家までかっいで行ってくれ。」

4111 daja φun ?ijunu na:joba ɕittɕunja. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。(1)の直接対象と同じく、この形式を用いるのが普通である

1813 maɕçiru ssun tuiŋa tinto:jo:ba tudui. 「真っ白な鳥が空を飛んでいる。」

1313 mitɕinu manna:jo:ba ?attɕe: ?ikan do:. 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

1213 ɕiko:zo:kara ?ariba human mitɕijo:ba ?iki jo:. 「空港ならこっちの道を行きなさい。」

## 2. 1. 5 n'i 格<sup>7</sup>

(1)動作のあいてや基準など、間接的な対象をあらわす。

7011 mitɕidzi gakkono:nu ɕinse:n'i ?o:tando:. 「道で学校の先生に会った。」

5614 φunu jumēt'a: tudzin'ibē: {kikatɕi/kikatɕan} do:. 「その話は妻にだけ聞かせた。」

3811 φuma: ?umin'i tɕikasannati ?ijuŋa ?umasando:. 「ここは海にちかいので魚がうまい。」

7411 hanako: tsuraŋa ?okka:n'i ju: n'itɕuija:. 「花子は顔がかあさんによく似ている。」

うけみ文や使役文で、動作の主体も n'i 格であらわされる。

6111 **ɕi:ro:ja ʔazinʲi butirattan(ɕi)**. 「次郎はじいさんにしかられた。」

5713 **tuzinʲi ji:jo:ba tsukuraɕi**. 「妻に夕飯を作らせる。」

(2)動作や状態のかかわるところ、動作や状態がなりたつときをあらわす。

1613 ʔitukunu ʔuduŋa **janpija:nʲi ɕutɕi ʔai**. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」

2311 mago:ŋa ɕuzukara **to:kʲo:nʲi ʔun**. 「孫が去年から東京にいる。」

3511 pakunu **na:nʲi manɕu:ŋa ʔikutsu ʔantɕi {ʔumujui/ʔumui}**. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

1111 ɕiko:ke: **ɕittɕi:nʲi ʔikkaiɕika nendo:**. 「飛行機は一日に一回しかない。」

2511 **hatɕigatsunʲie:<sup>8</sup> mudutte kʲuntɕagisan(ŋa)**. 「八月には帰ってくるようだ。」

(3)変化の結果をあらわす

5314 ɕuzu ʔitukuŋa **ɕu:gakko:nu ɕinse:nʲi {natan do:/nati}**. 「中学校の先生になった。」

また小野津方言では、移動動作の目的をあらわすのにも **-nʲi** が用いられる場合があった。ただし、**-ja** が融合したと思われるおそらくは本来の動詞目的形 (**tunnʲa** 「取りに」) も多く現れ、ゆれのあることから、この **-nʲi** は現代日本語共通語の「-に」からの類推と考える。

3712 ʔazi:ja kʲanmakara ʔumini {ʔiju/ʔijuwo} {**tuini/tunnʲa**} {ʔiɕi/ʔiɕando:}. 「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」

cf. 2611 ʔokka:ja ʔatɕa to:kʲo:kai musukonʲi **ʔo:nnʲa ʔikʲuntɕi**. 「かあさんはあした東京へむすこに会いに行く。」

## 2. 1. 6 ɕi 格<sup>9</sup>

(1)道具、手段をあらわす。

1011 ʔokinawanʲi **ɕunɕi ʔikʲujukka ɕiko:kizi ʔizan ho:ŋa jutasando:**. 「沖繩には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

3111 nʲimotsuŋa ʔubussatannati, **tʲaizi muttɕando:**. 「荷物が重かったので、二人でもった。」

3211 ɕun ʔuwagie: kono ʔaida ʔokina:ɕi **nʲisenendɕi ho:tando:**. 「この上着はこのまえ沖繩で二千円で買った。」

(2)材料や原料などの構成要素をあらわす。

5813 uto: **de:zi so:ɕijo:ba tsukuti**. 「夫は竹でかごをつくった。」

(3)うごきや状態がなりたつ場所をあらわす (場所名詞)。

2813 **jozimadi jekizi mattçuri jo:** 「四時まで駅でまっておれ。」

7011 **mitçidzi gakkonu çinse:n'i ?o:tando:** 「道で学校の先生に会った。」

3211 **φUN ?uwagje: kono ?aida ?okina:çzi n'isenençzi ho:tando:** 「この上着はこのまえ沖繩で二千円で買った。」

(4)原因をあらわす。この用法では名詞 **jamai**、**jami** (病気) の **zi** 格と動詞 **jamjui** (病む) の中止形 (**jadi**) とのあいだでゆれがみとめられるが、後者のほうが用いられやすいようである。このタイプの例文は1種しかないため、今後さらなる調査が必要である。

6613 **hanako: kin'u:kara jamaizi n'ittui.** 「花子はきのうから病気でねている。」

6614 **hanako: kin'u:kara {jadi/jamidzi} nittun do:** 「花子はきのうから病気でねている。」  
(花子はきのうから病んでねている。)

## 2. 1. 7 kai 格

移動の到着点をあらわす。

0211 **daŋa {h/φ}ate:kai ?iki.** 「おまえが畑へ行け。」

3713 **?azija ?asakara ?umikai ?iju tunn'a ?izi.** 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

## 2. 1. 8 tu 格

(1)相互的な動作のあいてをあらわす。

5911 **çziro:ja ?uttu:nu saburo:tu çikkitan(do:).** 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」

(2)相互的な関係がなりたつ、一方の対象をあらわす。

5111 **kadi: n'ibb'un{daki/bakkai} ?ariba ?inŋa:nk'a maja:tu {?iççoza/t'ittsuza:}.** 「食べて  
ねるだけなら いぬやねことおなじだ。」

7214 **kazukonutu t'itsu ?assa:jo:ba hanakon'imu ho:ti {kuriro:/kuriranba ja:}.** 「和子のと  
おなじげたを花子にもかってやろう。」

## 2. 1. 9 kara 格

(1)移動の出発点や動作や状態の開始時点など、コトガラコトガラの起点をあらわす。

2411 **mago:ja ?itsu to:k'o:kara mudujukka.** 「孫はいつ東京から帰るか。」

2311 **mago:ŋa φuzukara to:k'o:n'i ?UN.** 「孫が去年から東京にいる。」

3713 **?azija ?asakara ?umikai ?iju tunn'a ?izi** 「じいさんは朝から海へ魚をとり  
いった。」

(2)原料をあらわす。材料などを表す **zi** 格との使い分けについては確認できていないため、さらなる調査が必要である。

4411 se:ja ɸumɪkara {tsukujui/tsukku su}. 「酒は米からつくる。」

## 2. 1. 10 **gari** 格/**maɸi** 格

動作や状態のおよぶ範囲をあらわす。**-gari** と **-maɸi** の2つの形式が現れているが、後者のほうが新しい形であろう<sup>10</sup>。全く異なる形式ではあるが、ほぼ同じ機能をもつ新旧の形として1つの項目に納めている。なお、用例 2711、2713 は複合連体格の例である。

3011 ɸɪro:, kun nimutsuoba hakkiti ja:gari ?izi kuriri. 「次郎、この荷物を家までかついで行ってくれ。」

2811 jozi{made:/gari} ?ekizi mattɸuri. 「四時まで駅でまっておれ。」(\***made:**<**maɸi**+**-ja** 「四時までは」)

2711 ?o:sakakara to:k'o:gariɸu kiɸatɸino: k'ansakaja:. 「大阪から東京までの汽車賃はいくらだろうか。」

2713 ?o:sakakara to:k'o:maɸinu kiɸatɸino: k'ansakaja:. 「大阪から東京までの汽車賃はいくらだろうか。」

## 2. 1. 11 **gariɸi** 格/**maɸiɸi** 格

動作がそのときよりもまえに成立する、あるいは成立したことをあらわす。ここでも **-gariɸi** と **-maɸiɸi** の2つの形式が現れている。両形式の扱いについては 2.1.10 に準じる。

2911 gozigariɸi muduraɸba naranmun. 「5時までに帰らなくてはならない。」

2913 gozimaɸiɸi muduraɸba nara:. 「5時までに帰らなくてはならない。」

## 2. 2. 12 格の周辺 (あるいは周辺の格)

ここでは、現代日本語共通語の「-より」、引用の「-と」に対応する形式を挙げる。

### 2. 1. 12. 1 **-jukka**

比較の基準をあらわす。

1711 kin'ɸ:ja k'ɸ:jukka haɸiɸa tsusataja:. 「きのうは今日より風が強かった。」

3913 ?ijujukka n'ikunu ho:ɸa ta:sa. 「魚より肉のほうが高い」

### 2. 1. 12. 2 **-ɸi**

話や考えの内容をあらわす。

3511 pakunu na:n'ɸi maɸɸu:ɸa ?ikutsu ?antɸi {?umujui/?umui}. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

## 2. 2 志戸桶

志戸桶方言には以下の 11 の格形式と 2 つの周辺的な形式がみとめられる。

### 2. 2. 1 $\eta$ 格

(1) 述語のさししめす動作、変化、状態の主体をあらわす。このとき、 $\eta$  格名詞は従属節にも現れることができる (6831、3132)。

1831  $\text{çiru tu}\eta\text{a tin tudi uija}$ : 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」

1531  $\text{?ari, ?am}\eta\text{a } \{\text{?utitt}\text{çan}/\text{?utitt}\text{çi}\}$ : 「あ、雨が降ってきた。」

5331  $\text{?uzuo: ?itukun}\eta\text{a } \text{çu:gakko:nu } \text{çinse:n}^i \text{ } \{\text{nat}^a/\text{natan}\}$ : 「去年いとこが中学の先生になった。」

1931  $\text{?an jaman}^i\text{: ?inu}\text{çi}\text{çin}\eta\text{a unti:}\{\text{do:}/\eta\text{a}\}$ : 「あの山にはいのししがいるそうだ。」

6831  $\text{?içan}\eta\text{a kurita}\{\text{N}/\text{nu}\} \text{ kusui num}\eta\text{ba no:juro:}$ : 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」

3132  $\text{nimotsun}\eta\text{a } \text{?ubusatatannati t}^2\text{aiçi } \{\text{mutt}\text{çan}/\text{mutt}\text{ça:}\}$ : 「荷物が重かったので、二人でもった。」

また、いわゆる〈総記〉の用法もみとめられる。

0232  $\text{da}(\text{:})\eta\text{a pate:kai } \{\text{?iki}/\text{?iki}\}$ : 「おまえが畑へ行け。」

0331  $\text{n:}, \text{?akkai wa}\eta\text{a } \text{?ik}^i\text{un}\{\text{kara}/\text{na}\}$ : 「うん、畑へはおれが行く。」

0631  $\text{dirun}\eta\text{a da: hasajo:}$ : 「どれがおまえの笠だ。」

0731  $\text{?un hasan}\eta\text{a wa: } \{\text{munu}/\text{mun}\}$ : 「その傘がおれのだ。」

(2) 感情や能力の対象をあらわす。

3432  $\text{mago:ja k}^w\text{açi/ kaçi sukidza}$ : 「孫はお菓子が好きだ。」

4033  $\text{wano: to:nu saçimiga kanbusai}$ : 「おれは蛸のさしみが食べたい。」

5431  $\text{?ituko: je:gonu hon}\eta\text{a j}^2\text{umi ?usui}$ : 「いとこは英語の本が読める。」<sup>11</sup>

### 2. 2. 2 nu 格

(1) あとに続く名詞句を修飾する連体修飾語となり、その属性や関係するものをあらわす。なお nu 格をとる名詞(句)は 1 人称、2 人称代名詞を除き (2.2.3 参照) 制限されていない。

1632  $\text{?itukunu } \text{?udu}\eta\text{a janpira:nu wi:ni hutçi ?ai}$ : 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」

5931  $\text{çiro:ja ?uttu:nu saburo:tu } \{\text{çikkit}^a/\text{çikkiti}\}$ : 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」

- 4133 *daja ?un ?ijunu na:ja ci:ttəunn<sup>1</sup>a*. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」  
3531 *?un φakunu na:n<sup>1</sup>i (mandəu:ŋa) ?ikutsu ?antəi ?umuju{i/N}* 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」  
7031 *mitçizi qakko:nu çinse:n<sup>1</sup>i {?o:ti/?o:tan}*. 「道で学校の先生に会った。」

また *nu* 格は、他の方言と同じく「NP1-*nu* NP2」で用いられるのが基本であり、現代日本共通語の形式名詞的な「の」に相当する用法はほぼ許容されない<sup>12</sup>。以下の用例では( )に例文の逐語訳を記す。

- 0531 *?un hama: taro:nu hamakaja:*. 「この鎌は太郎のか。」(その鎌は太郎の鎌か。)  
0932 *?ure: ?uttu:nu mun<sup>1</sup>kamo wakara:(D)* 「それはおとうとのものかもしれない。」(それはおとうとのものかもわからない。)  
6333 *?un çinbunja k<sup>1</sup>u:nu mun<sup>1</sup> za. kin<sup>1</sup>u:nu mun<sup>1</sup>o: ?uri za*. 「その新聞はきょうのだ。昨日のはこれだ。」(その新聞は今日のものだ。昨日のものはそれだ。)

(2)主節主語となる。現在の志戸桶方言の *ŋa* 格と *nu* 格は主格と属格としてほぼ完全に役割分化しており、主節主語としての *-nu* の出現は感嘆形(波線部)などとの呼応に限られるようである(1431)。ただし、その用法も衰退しつつあると見られる(cf.1432)。

- 1431 *mitçinu {φ/p}irusaja:*. 「道が広いなあ。」  
cf. 1432 *mitçin<sup>1</sup>a pirusaja:*. 「道が広いなあ。」

従属節主語では *-nu* は多く現れている。だが 2.2.1 で挙げた用例 6831、3132 と見比べると明らかのように、ここでの *-nu* は訳文の「の」に対応して用いられているにすぎず、やはり *ŋa* との使い分けは失われている。

- 2232 *?anu m<sup>1</sup>:nu ?ubisan ?irunu çirusan jinŋa: tarukai.(D)* 「あの目のおおきい、色の白い男はだれだろう。」  
6433 *?aminu hujun {p/φ}in<sup>1</sup>e: ?anmaja ja:zi terebibe: mitçun*. 「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

## 2. 2. 3 Ø 格

(1)述語のさししめず動作の直接的な対象をあらわす。同様の用法が 2.2.4 の *ba* 格にもみとめられるが、志戸桶方言では Ø 格で現れるのが普通のような<sup>13</sup>。

- 6831 *?içaŋa kurita{N/nu} kusui numiba no:juro:*. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」  
6233 *wano: kin<sup>1</sup>u:ja çinbun jumantan*. 「おれはきのうは新聞をよまなかった。」  
3731 *?azi:ja k<sup>2</sup>anmakara ?umikai ?iju tunja ?içan*. 「じいさんは朝から海へ魚をとり

いった。」

6731 hanako: ?okkann<sup>ji</sup> mun kamat<sup>ci</sup> {mura:tan/mura:ti}. 「花子がかあさんにごはんをたべさせてもらった。」

5733 tuzin<sup>ji</sup> ju:ban {t<sup>c</sup>/ts}ukkasun. 「妻に夕飯を作らせる。」

7131 nu: ho:jukkaja:. 「なにを買おうか。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。なお(1)の直接対象と同じく、ba 格にも同様の用法がみとめられる。

1331 mit<sup>cinu</sup> manna: ?att<sup>ce</sup>: ?ikando:. 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

1831 <sup>ci</sup>ru tui<sup>ja</sup> tin tudi uija:. 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」

(3)人称代名詞のうち、1人称代名詞、2人称代名詞(単数)は連体修飾語となるのに、nu 格ではなく Ø 格形式をとる<sup>14</sup>。また、連体修飾語となる nu 格の場合と同じく、Ø 格でも形式名詞的な「の」に相当する用法はみとめられていない(0731、0831 \*())は例文の逐語訳)。

0431 wa: kw<sup>e</sup>:ja {<sup>ɕ</sup>a:n<sup>ji</sup> ?akka(B)/<sup>ɕ</sup>a:kaina(A)}. 「おれの鋏はどこにある。」

0731 ?un hasa<sup>ja</sup> wa: {munu/mun}. 「その傘がおれのだ。」(その傘がおれのもの(だ)。)

4631 wanna: ?azi<sup>ja</sup> se:mu tabakumu numan(do:). 「うちのじいさんは酒もたばこものまない。」

2431 (wanna:) magu:ja ?itsu to:k<sup>jo</sup>:kara {mudujukka /mudut<sup>ji</sup> k<sup>ju</sup>ka}. 「孫はいつ東京から帰るか。」(うちの孫はいつ東京から{戻るか/戻って来るか}。)

0631 diru<sup>ja</sup> da: hasa<sup>jo</sup>:. 「どれがおまえの筥だ。」

0831 ?un <sup>ɕ</sup>uru<sup>ci</sup>ke: da: munna. 「そのふろしきはおまえのか。」(そのふろしきはおまえのものか。)

ヒト固有名詞(すなわち人名)も、その連体修飾語は Ø 格形式をとるようである。用例が1例のみ、また3人称代名詞の用例はないため、今後さらなる調査が必要である。

7233 kazuko muntu jin munnu ?assa:ba hanakon<sup>ji</sup>mu ho:ti kurijun. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」(和子のものとおなじげたを花子にもかってやろう。)

また、話者によっては Ø 格ではなく nu 格が用いられることもあるようである。なお以下の用例は、小野津方言でみとめられたものと同じ訳文のものである(2.1.3の0413、0611参照)。

cf. 0432 (D) wannu kwe:ja <sup>ɕ</sup>a:n<sup>ji</sup> ?ai. 「おれの鋏はどこにある。」

0632 (D) diru<sup>ja</sup> da:nu kasaka. 「どれがおまえの筥だ。」

## 2. 2. 4 ba 格

(1) 述語のさししめす動作の直接的な対象をあらわす<sup>15</sup>。なおすでに述べたように、この用法では Ø 格を用いるほうが普通である

3631 mago:ja mandzu:ba {hawa/ha:}be: kam<sup>1</sup>UN. 「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

7233 kazuko muntu jin munnu ?assa:ba hanakon<sup>1</sup>imu ho:ti kurijun. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」

5831 uto: {de:de:/de:zi} magu:(ba) {tsukut<sup>2</sup>a/tsukuti}. 「夫は竹でかごをつくった。」

4131 daja: ?UN ?ijunu na:(ba) çittçUNja. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」

(2) 動作のかかわる場所をあらわす (場所名詞)。直接対象の用法と同じく、この用法でも Ø 格のほうが優勢のようである。

1832 {maççiru:/çiru:} tui(:)ŋa tinto:ba tudui. 「真っ白な鳥が空を飛んでいる。」

1332 mitçinu manna:ba ?attçe: ?ikan.(C) 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

1231 çiko:ðo:kae: {?UN/?uma} mitçi(ba) {?iki/?ikiba jutasan}. 「空港ならこっちの道を行きなさい。」

なお、-ba ではなく -juba が用いられている用例が 1 例あったが、小野津など周辺方言からの影響による一時的な使用と考える。

cf. 7231 kazukotu jin ?assa:(juba) hanakon<sup>1</sup>imu ho:ti kuriro:. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」

## 2. 2. 5 n<sup>1</sup>i 格

(1) 動作のあいてや基準など、間接的な対象をあらわす。

7033 mitçizi gakkono:nu çinse:n<sup>1</sup>i {?o:tan/?o:ti}. 「道で学校の先生に会った。」

5631 ?UN panase: tuzin<sup>1</sup>i:bë: k<sup>2</sup>ikatçAN. 「その話は妻にだけ聞かせた。」

3833 ?uma: ?umin<sup>1</sup>i çikasankara ?ijuga ?umasan. 「ここは海にちかいので魚がうまい。」

7431 hanako: tsuraŋa ?okkann<sup>1</sup>i ju: {n<sup>1</sup>itçui/n<sup>1</sup>itçUN}. 「花子は顔がかあさんによく似ている。」

うけみ文や使役文で、動作の主体も n<sup>1</sup>i 格であらわされる。

5731 tuzin<sup>1</sup>i ju:ban(ba) {tsukuratçAN/tsukurASUN/tsukkasUN}. 「妻に夕飯を作らせる。」

6033 saburo:ja ziron<sup>1</sup>i bo:zi ?utattan. 「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

(2) 動作や状態のかかわるところ、動作や状態がなりたつときをあらわす。

1631 ?itukunu ?uduŋa janpira:n<sup>1</sup>i {çutçEN/çutçei ?AN}. 「いとこの布団がやねの上にほし

てある。」

- 2331 magu:ja  $\phi$ uzukara to:k'o:n'i ui. 「孫が去年から東京にいる。」  
3531 ?un  $\phi$ akunu na:n'i (mandu:ŋa) ?ikutsu ?antɕi ?umuju{i/N}. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」  
1131  $\phi$ iko:kɕe:  $\phi$ ittɕi:n'i ?ikkaiɕika nendo:. 「飛行機は一日に一回しかない。」  
2531 hatɕigatsun'ɕe:<sup>16</sup> mudut'i k'UN {nessui/nessUN}. 「八月には帰ってくるようだ。」

(3)変化の結果をあらわす

- 5331  $\phi$ uzu: ?itukuŋa tɕ:gakko:nu ɕinse:n'i {nat'a/natan}. 「中学校の先生になった。」

なお、小野津方言や現代日本語共通語の「-に」とは異なり、志戸桶方言の-n'i は移動動作の目的をあらわすのには用いられない。

cf. 3731 ?azi:ja k'anmakara ?umikai ?iju tunja ?idɕan. 「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」)

6931 ?okkano: ?itɕibakai ho:i mun ɕinn'a {?izan/?izi}. 「かあさんは市場へ買い物に行った。」(かあさんは市場へ買い物しに行った。)

## 2. 2. 6 zi 格<sup>17</sup>

(1)道具、手段をあらわす。

- 1031 {?okinawa/naɕa}n'ɕe  $\phi$ unɕi ?ik'UN jukkamu ɕiko:kɕi ?izan ho:ŋa jutasaija:. 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」  
3131 n'i:ŋa {?ubussati:/?ubussatannati} t'aɕi {mutɕan(do:)/mutɕi}. 「荷物が重かったので、二人でもった。」  
3231 ?un ?kino:  $\phi$ unnɕe: ?okinawazi n'isenenɕi {ho:tando:/ho:tittɕan}. 「この上着はこのまえ沖縄で二千元で買った。」

(2)材料や原料などの構成要素をあらわす。

- 5833 uto: de:ɕi kago: {sutɕa/tsutɕan}. 「夫は竹でかごをつくった。」

(3)うごきや状態がなりたつ場所をあらわす(場所名詞)。

- 2832 joɕimade ɕekiɕi mattɕuri. 「四時まで駅でまっておれ。」  
7033 mitɕi gakko:nu ɕinse:n'i {?o:tan/?o:ti}. 「道で学校の先生に会った。」  
3231 ?un ?kino:  $\phi$ unnɕe: ?okinawazi n'isenenɕi {ho:tando:/ho:tittɕan}. 「この上着はこのまえ沖縄で二千元で買った。」

(4)また、原因をあらわす用法もみられた。志戸桶方言の場合も、名詞 **bjo:ki** (病気) の **zi** 格よりも動詞 **jamjui** (病む) の中止形を用いる方がよいようである(cf.6631)。

6633 hanako: kin<sup>h</sup>u:kara bjo:kizi nittu{i/N}. 「花子はきのうから病気でねている。」

cf. 6631 hanako: kin<sup>h</sup>u:kara jadi nittui. 「花子はきのうから病気でねている。」(花子はきのうから病んでねている。)

以上の他、**zi** 格とともに **-de**、**-nti** という形式も見られたが、類似の形式は他の方言にも見られず、あくまでも個人的な使用ではないかと考える。

5831 uto: {de:de/de:zi} magu:(ba) {tsukut<sup>a</sup>/tsukuti}. 「夫は竹でかごをつくった。」

6431 {?amɨɸui n<sup>h</sup>ie:/?amnu ɸujun pin<sup>h</sup>ie:} ?anma:ja {ja:ɸi/ja:nti} terebi{bē:/bakkai} mitɕun. 「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

## 2. 2. 7 kai 格

移動の到着点をあらわす。

0232 da(:)ŋa pate:kai {?iki/?iki}. 「おまえが畑へ行け。」

3731 ?azi:ja k<sup>h</sup>anmakara ?umikai ?iju tunja ?iɸan. 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

## 2. 2. 8 tu 格

(1)相互的な動作のあいてをあらわす。

5933 ziro:ja ?uttu:nu saburo:tu ɸikkitan. 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」

(2)相互的な関係がなりたつ、一方の対象をあらわす。

5131 kadi: n<sup>h</sup>ippunde: ?ariba ?inŋa:ja maja:tu {t<sup>h</sup>itsu/jin} mun. 「食べてねるだけならいぬやねことおなじだ。」

7233 kazuko muntu jin munnu ?assa:ba hanakon<sup>h</sup>imu ho:ti kurijun. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」(和子ものとおなじげたを花子にもかってやろう。)

## 2. 2. 9 kara 格

(1)移動の出発点や動作や状態の開始時点など、コトガラことガラの起点をあらわす。

2431 (wanna:) magu:ja ?itsu to:k<sup>h</sup>o:kara {mudujukka /mudut<sup>h</sup>i k<sup>h</sup>ukka}. 「孫はいつ東京から帰るか。」

2331 magu:ja ɸuzukara to:k<sup>h</sup>o:n<sup>h</sup>i ui. 「孫が去年から東京にいる。」

3731 ?azi:ja k<sup>h</sup>anmakara ?umikai ?iju tunja ?iɸan. 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

(2)原料をあらわす用法も見られた。ただし、話者によっては **zi** 格が用いられており (cf.4433)、英語の **of** と **from**、現代日本語共通語の **デ格** と **カラ格** に見られるような使い分けはないようである。

4431 se:ja ɸumɪkara tsukkʲusu(do:). 「酒は米からつくる。」

cf. 4433 se:ja ɸumɪzi tɕukkʲui. 「酒は米からつくる。」(酒は米でつくる。)

## 2. 2. 10 **madi** 格

動作や状態のおよぶ範囲をあらわす。なお、用例 2731 は複合連体格の例である。

3031 ɕiro:, ?un nʲimutsu: ja:madi hatamiti ?i:zi kuri. 「次郎、この荷物を家までかっいで行ってくれ。」

2831 jozimate: jekizi mattɕuri. 「四時まで駅でまっておれ。」(四時までは駅でまっておれ。 \*made:<madi+-ja)

2731 ?o:sakakara to:kʲo:madinu kiɕatɕino: tɕʰansakaja:. 「大阪から東京までの汽車賃はいくらだろうか。」

## 2. 2. 11 **madinʲi** 格

動作がそのときよりもまえに成立する、あるいは成立したことをあらわす。

2932 godɕimadini muduranba {nara:/naran}. 「5時までに帰らなくてはならない。」

## 2. 2. 12 格の周辺 (あるいは周辺の格)

ここでは、現代日本語共通語の「-より」、引用の「-と」に対応する形式を挙げる。

### 2. 2. 12. 1 **-jukka(mu)**

比較の基準をあらわす。

1731 kinʲu:ja kʲu:jukka(mu) ha:ziŋa {tsusanatittɕan/tsusanatittɕija:/tsukunati}. 「きのうは今日より風が強かった。」(きのうは今日より(も)風が強かった。)

3933 ?ijujukkamu nʲikunu ho:ga ta:sa{N/i}. 「魚より肉のほうが高い」(魚よりも肉のほうが高い。)

### 2. 2. 12. 2 **-tɕi**

話や考えの内容をあらわす。話者によっては **-tɕu** の形も用いられるようである(3532)。

3531 ?un ɸakunu na:nʲi (mandɕu:ŋa) ?ikutsu ?antɕi ?umuju{i/N}. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

3532 hakunu na:ni mandɕu:ŋa tɕansa {?antɕi ?umujui(D)/?antɕu ?umujukka(C)}. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

## 2. 3 上嘉鉄

上嘉鉄方言には以下の13の格形式と2つの周辺的な形式がみとめられる。

### 2. 3. 1 $\eta a$ 格

指示代名詞に後接して述語のさししめす状態の主体をあらわす用法がみられた。他の方言とは異なり、上嘉鉄方言ではいわゆる主格、属格が  $nu$  格に統合されつつあると考えられるのだが、以下の例 2153 から、名詞のタイプによる  $nu$  格と  $\eta a$  格の使いわけもかろうじて保たれていることがわかる。

2153  $?\text{an}\eta a$  jakubaza. 「あれが役場だ。」(「データ集」2151も同)

なお、 $-nu$  と  $-\eta a$  のゆれのみとめられる用例もいくつか現れている。ヒト名詞の場合、使い分け意識の名残であることも考えられるが、普通名詞の例も多く、いずれも共通語からの類推であろう。

5353 kudo:  $?\text{ituku}\{nu/ga\}$   $\text{t}\epsilon\text{u:gakko:nu}$   $\text{c}\text{inse:n}\text{i}$  natan. 「去年いとこが中学の先生になった。」

6852  $?\text{ica}\{ga/nu\}$  kuritan kusuri numiba:  $\{no:r\text{in}/no:r\text{ikkamu}\}$  do: 「医者がくれたくすり  
をのめばなおるだろう。」

1853  $\text{c}\text{iru}$   $\text{turi:ga}$   $\text{tinto:oba}$  tubun. 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」(→2.3.2の1851)

また、いわゆる<総記>の用法で、疑問詞、疑問文の答えとなる名詞に  $-\eta a$  が後接している例も見られた。なお 2.3.2 で述べるように、この用法では  $-nu$  よりも助辞  $-ja$  の後接したと思われる形式が多く現れている。

0653  $\text{dun}\eta a$  da: hasa jo. 「どれがおまへの筈だ。」

0753  $?\text{un}$   $\text{hasa}\eta a$  wa: mun. 「その筈がおれのだ。」

### 2. 3. 2 $nu$ 格

(1)述語のさししめす動作、変化、状態の主体をあらわす。すでに述べたように、上嘉鉄方言では  $\eta a$  格が衰退しつつあり、 $nu$  格がこの用法の中核をになっている。よって一部の指示代名詞を除き、 $nu$  格をとる名詞(句)は制限されていない。またこのとき、 $nu$  格名詞は従属節にも現れることができる(6851、3151)。

1551 nama,  $?\text{aminu}$   $\{\phi\text{urent}\text{c}\text{i}/\phi\text{urent}\text{c}\text{an}\}$ . 「あ、雨が降ってきた。」

1851  $\text{c}\text{irudurinu}$   $\text{tinto:}\{\text{oba}\}$   $\{\text{tubo:ri}/\text{tubo:ndo}\}$ . 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」

1453  $\text{mit}\text{c}\text{inu}$   $\text{c}\text{irusarija}$ :. 「道が広いなあ。」

1751 kiju:  $\text{c}\text{u:juri}$   $\text{hadinu}$   $\{\text{t}\text{c}\text{usari}/\text{t}\text{c}\text{usatando}\}$ . 「きのうは今日より風が強かった。」

- 1953 ?an jamajeno: ?inoçiçinu ?unbe:za. 「あの山にはいのししがいるそうだ。」  
6851 ?içanu kuritan kuçurije: numiba: no:r<sup>1</sup>ukkamu wakarando:. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」  
3151 n<sup>1</sup>imutunu ?ubussa munnare: t<sup>2</sup>arije: mutçe:dzan(do:). 「荷物が重かったので、二人でもった。」

また、いわゆる<総記>の用法もみられたが、今回の調査では nu 格が用いられるのは 1 人称代名詞のみであり、それ以外は助辞-ja の融合した形式<sup>18</sup>が用いられている(cf.)。

- 0353 ?i:, hate:katçe: w<sup>1</sup>annu ?ika. 「うん、畑へはおれが行く。」  
cf. 0651 diruo: da: {munnu haçana/muno: haça}. 「どれがおまえの笠だ。」  
0751 φUN {haça:/hasa:} wa: mundo:. 「その傘がおれのだ。」

(2)あとに続く名詞句を修飾する連体修飾語となり、その属性や関係するものをあらわす。なお nu 格をとる名詞(句)は 1 人称、2 人称代名詞を除き (2.3.3 参照) 制限されていない。

- 1653 ?itukunu ?udo: janinu {?uwe:/wi:en} φusen an. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」  
5952 d<sup>1</sup>iro:ja ?uttunu saburo:tu çittçitan do:. 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」  
4152 da: ?un junu na: çironn<sup>1</sup>a:. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」  
3551 hakunu nakae: mançu:nu çansa ?akka wakaran{ka:/na:}. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」  
7051 mittçije: g<sup>1</sup>akko:nu çinçe:{tu/e} o:t<sup>2</sup>an(do:). 「道で学校の先生に会った。」

また、nu 格はやはり「NP1-nu NP2」で用いられるのが基本であり、現代日本共通語の形式名詞的な「の」に相当する用法はみとめられない。以下の用例では ( ) に例文の逐語訳を記す。

- 0553 ?un kama: taro:nu munna?. 「この鎌は太郎のか。」(その鎌は太郎のものか。)  
0953 ?ure: ?uttunu mun<sup>1</sup>kamu çirira:. 「それはおとうとのものかもしれない。」(それはおとうとのものかもわからない。)  
6353 ?un çinbuno: su:nu mun za. dzijo:nu muno: ?uriza. 「その新聞はきょうのものだ。昨日のはこれだ。」(その新聞は今日のものだ。昨日のものはそれだ。)  
7251 kazukonu mun<sup>1</sup>tu t<sup>2</sup>itumun assa:(o:ba) hanakoemu ho:e: kuririjo:. 「和子のものとおなじげたを花子にもかってやろう。」(和子のものと同じげたを花子にもかってやろう。)

(3)感情や能力の対象をあらわす。

- 4052 wano: to:nu sasuminu {kanbusan/kanbusarija:}. 「おれは蛸のさしみが食べたい。」  
3453 mago: k<sup>2</sup>açinu sutçin do:. 「孫はお菓子が好きだ。」

5453 ?ituko: je:gonu honnu juminçin. 「いところは英語の本が読める。」<sup>19</sup>

### 2. 3. 3 Ø 格

(1)述語のさししめす動作の直接的な対象をあらわす。同様の用法が 2.3.4 の o:ba 格にもみとめられるが、どちらも同程度に用いられているようである。例えば、以下の 7252、3653、5753 の同じ訳文からの別の用例では、o:ba 格形式も現れている。

6853 ?isanu kuritan kusuri numiba {no:rikkaja:/no:riro:}. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」

7252 kadzukotu ninmunnu ?assa: hanakojenmu {ho:okaja/ho:o:ja}. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」

6251 wano: kiju:ja çinbun mirant<sup>2</sup>ando:. 「おれはきのうは新聞をよまなかった。」

3653 mago: manzu: kawadake kamin. 「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

5753 tuze:n ji: {tukkatça/tukkaçin}. 「妻に夕飯を作らせる。」

7153 nu: ho:ka(ja:). 「なを買おうか。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。なお(1)の直接対象と同じく、o:ba 格にも同様の用法がみられる。

1253 çiko:zo:katçe: ?un mitçi tu:re:ki (jo:). 「空港ならこっちの道を行きなさい。」

1353 mitçinu mannaka ?attçiba ?ikan (do:). 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

(3)人称代名詞のうち1人称、2人称代名詞の単数形は連体修飾語となるのに Ø 格形式をとる。なお、1人称複数では今回の調査では確認できなかった。また、連体修飾語となる nu 格の場合と同じく、Ø 格でも形式名詞的な「の」に相当する用法はみとめられていない(0751、0853 \*() は例文の逐語訳)。

0453 wa: ke:ja za:n<sup>1</sup>i ?ari jo?. 「おれの鍬はどこにある。」

0751 φun {haça:/hasa:} wa: mundo:. 「その傘がおれのだ。」(その傘がおれのもの(だ)。)

0653 dunña da: hasa jo. 「どれがおまえの笠だ。」

0853 ?un ?usukki(:)ja da: munna. 「そのふろしきはおまえのか。」(そのふろしきはおまえのものか。)

なお、1例のみだが nu 格形式が用いられている用例も現れた(cf.0451)。また、状態の主体をあらわす Ø 格形式の用例もみられた(cf.3952)。

cf. 0451 {wanun/wannu} k<sup>2</sup>e:ja ça:n<sup>1</sup>i {?arijo/?ando:}. 「おれの鍬はどこにある。」

3952 ?ju:jori nikudu takasa(do:). 「魚より肉のほうが高い。」(魚より肉ぞ<sup>20</sup>高い(よ))

2. 3. 4 o:ba 格<sup>21</sup>

(1)述語のさししめず動作の直接的な対象をあらわす<sup>22</sup>。すでに述べたように、Ø 格形式と併用されている。

3751 ?azi:ja k<sup>2</sup>anmakara {?umikatçi/?umije:} j<sup>2</sup>u:o:ba tunja ?izando:.「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

5851 utu:o: de:e: kagooba t<sup>2</sup>ukut<sup>2</sup>ando:.「夫は竹でかごをつくった。」

5752 tuçien ji:jo:ba {tsukkatçi/tukka çin}.「妻に夕飯を作らせる。」

7251 kazukonu muntu t<sup>2</sup>itumun assa:(o:ba) hanakoemu ho:e: kuririjo:.「和子のおなじげたを花子にもかってやろう。」

3651 mago: mandçu:(o:ba) w<sup>2</sup>abe:daki kamindo:.「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。直接対象とは異なり、用例は少ない。

1853 çiru turi:ga tinto:oba tubun.「真っ白な鳥が空を飛んでいる。」

2. 3. 5 en 格<sup>23</sup>

(1)動作のあいてや基準など、間接的な対象をあらわす。

7252 kadzuotu ninmunnu ?assa: hanakojenmu {ho:okaja/ho:o:ja}「和子のおなじげたを花子にもかってやろう。」

5653 ?un hanase: {tuzen/tuzien}daki kikatçan.「その話は妻にだけ聞かせた。」

5651 ?un hanaçie: tuzidakie: çikatçando:.「その話は妻にだけ聞かせた。」(その話は妻だけに聞かせたよ。)

3853 ?uma:ja ?umijen çikasan munen junu masan.「ここは海にちかいので魚がうまい。」

7452 hanako: t<sup>2</sup>uranu ?okkan<sup>1</sup>e: ju: {ni:jo:ri/ni:o:ri} ja:.「花子は顔がかあさんによく似ている。」(?okkan<sup>1</sup>e:<?okkan+e:)

うけみ文や使役文で、動作の主体も en 格であらわされる。

6051 çaburo:ja çiro:e: {bo:/guçi:}e: ?ut<sup>2</sup>at<sup>2</sup>an.「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

6751 hanako: ?anma:e: munoba kamaçe: murat<sup>2</sup>ando:.「花子はかあさんにごはんをたべさせてもらった。」

5752 tuçien ji:jo:ba {tsukkatçi/tukka çin}.「妻に夕飯を作らせる。」

(2)動作や状態のかかわるところ、動作や状態がなりたつときをあらわす。

1653 ?itukunu ?udo: janinu {?uwe:/wi:en} çusen an.「いとこの布団がやねの上ほしである。」

2353 mago:nu ?udukara to:k<sup>1</sup>o:jen ?un.「孫が去年から東京にいる。」

3551 hakunu nakae: manɕu:nu ɕansa ʔakka wakaran{ka:/na:}. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

1953 ʔan jamajeno: ʔinoɕiɕinu ʔunbe:za. 「あの山にはいのししがいるそうだ。」

1151 ɕiko:kje: ɕittɕi:e: ʔikkaiɕika ne:ran(do:). 「飛行機は一日に一回しかない。」

(3)動作や状態がなりたつ場所をあらわす(場所名詞)。

2851 jozimade: jekie: matɕo:rijo:. 「四時まで駅でまっておれ。」

7052 mitɕe: gakko:nu ɕinse:tu o:tando:. 「道で学校の先生に会った。」

3251 ɕun ʔuwage: nanma ʔokinawae: nʔiɕenjenɕe: ho:tando:. 「この上着はこのまえ沖縄で二千元で買った。」

(4)道具、手段をあらわす。

1051 ʔokinawanʔie ɕunie: ʔikʔunjuri ɕiko:kje: ʔizan ho:ŋa jutasando:. 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

3151 nʔimutunu ʔubussa munnare: tʔarie: mutɕe:ɕan(do:). 「荷物が重かったので、二人でもった。」

6052 saburo:{wa/ja} ɕi:ro:ni guɕi:{de/hen/jen} ʔutattan do:. 「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

(5)材料や原料などの構成要素をあらわす。

5851 utɕo: de:e: kagooba tʔukutʔando:. 「夫は竹でかごをつくった。」

(6)原因をあらわす用法もみられた。上嘉鉄方言でも、名詞 jamai (病気) の en 格のほか、動詞 jamjui (病む) の中止形の用例が現れている(cf.6653)。

6651 hanako: kiju:kara jamaie: nʔinbondo:. 「花子はきのうから病気でねている。」

cf. 6653 hanako: su:kara jamɛn nʔinbun. 「花子はきのうから病気でねている。」(花子はきのうから病んでねている。)

(7)移動の到着点をあらわす。

0351 n:, hate:{je/e} wannu ʔikin. 「うん、畑へはおれがいく。」

3752 ʔaɕi:ja kʔanmakara {umikatɕi/umije:} ʔju: tunnʔa ʔidza(do:). 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

以上示してきた en 格の各用法について、(1)間接対象、(2)動きにかかわるところ・ときは nʔi 格と(2.3.6)、(3)動きがなりたつ場所は zen 格と(2.3.8)、(4)道具、手段、(5)構成要

素、(6)原因は **sen** 格と(2.3.7)、(7)到着点は **katçi** 格(2.3.9)と、それぞれ重なっている。

### 2. 3. 6 **n'i** 格

(1)動作のあいてや基準など、間接的な対象をあらわす。**en** 格にも同様の用法がみられる(2.3.5の(1))。<sup>24</sup>

7253 **kazukonu muntu jinmun getao hanakon'imu ho:en turaso:**。「和子のとおなじげたを 花子にもかかってやろう。」

3852 **?uma:ja umini tçikasannati ?junu {?masando:/umasando:}**。「ここは海にちかいので魚がうまい。」

7451 **hanako: ?anma:{e:/n'i} tura: t'itumundo:**。「花子は顔がかあさんによく似ている。」

うけみ文や使役文で、動作の主体も **n'i** 格であらわされる。

6053 **saburo:wa ziro:{n'i/en} bo:sen ?utattan:**。「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

6752 **hanako: {?okka:/?okkan}ni mun{woba/joba} kamasarondo:**。「花子はかあさんにごはんをたべさせてもらった。」

(2)動作や状態のかかわるところ、動作や状態がなりたつときをあらわす。この用法は **en** 格でもあらわされる(2.3.5の(2))。

1651 **?itukunu {?utunnu/?udunu} j<sup>2</sup>ançira:(nu) {ui:n'i/ui:e} ?uça:ri:**。「いとこの布団が やねの上にほしてある。」

2351 **magu: ?udukara to:k'o:{je:/n'i} undo:**。「孫が去年から東京にいる。」

2551 **hatçigatsun'ie: muduren çikkamu wakarando:te:**。「八月には帰ってくるようだ。」

(3)変化の結果をあらわす。これは **en** 格にはみられない用法である。また  $\emptyset$  格形式の用例が現れているが(5332)、用例数自体が少ないためさらなる調査が必要である。

5351 **φudu ?itukunu tçu:gakko:nu çinçe:n'i natando:**。「去年いところが中学校の先生になった。」

cf. 5352 **hudu: ?itokonja tçu:gakko:nu çinse: natan(do:)**。「去年いところが中学校の先生になった。」(去年いところが中学校の先生なった(よ)。)

なお上嘉鉄方言でも、**-n'i**、**-en** とともに移動動作の目的をあらわすのには用いられない<sup>25</sup>。

cf. 3751 **?azi:ja k<sup>2</sup>anmakara {?umikatçi/?umije:} j<sup>2</sup>u:o:ba tunja ?izando:**。「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」)

6952 **?okka:ja wankatçi mun horija ?içan do:**。「かあさんは市場へ買物に行った。」

2651 ?anma:ja ?atça to:k'io:katçi jinŋank<sup>2</sup>annari ?o:i:ja ?i{tç/k}indo:. 「かあさんはあした東京へむすこに会いに行く。」

### 2. 3. 7 sen 格<sup>26</sup>

(1)道具、手段をあらわす<sup>27</sup>。en 格にも同様の用法がみられる(2.3.5の(4))。

3153 n'imotsunu {?ubussaren/?ubusattan munen} ?tarisen muttçan. 「荷物が重かったので、二人でもった。」

6053 saburo:wa ziro:{n'i/en} bo:sen ?utattan. 「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

3251 φun ?uwage: nanma ?okinawae: n'içenjençe: ho:tando:. 「この上着はこのまえ沖縄で二千円で買った。」

(2)材料や原料などの構成要素をあらわす。この用法も、en 格に重なる(2.3.5の(5))。

5852 utto: de:he: so:bi tukutando:. 「夫は竹でかごをつくった。」

(3)原因をあらわす用法もみられた。上2つの用法と同じく、やはり en 格にもみられる用法である(2.3.5の(6))。

6652 hanako: tçiju:kara jamai{sen/se:} ninbon do:. 「花子はきのうから病気でねている。」

### 2. 3. 8 zen 格

うごきや状態がなりたつ場所をあらわす(場所名詞)。同様の用法が en 格にもみられる(2.3.5の(3))。

2853 jozimadi jeki{je/zen} matço:ri jo:. 「四時まで駅でまっておれ。」

7053 mitçizen gakkono:nu çinse:tu ?o:ta. 「道で学校の先生に会った。」

3253 ?un ?uwage: nanma:ta ?okinawazen n'isenenzen ko:tan. 「この上着はこのまえ沖縄で二千円で買った。」(注 27 も参照)

また次の用例では、zen 格、n'i 格、en 格の3形式でゆれがみとめられた。場所名詞がこれらの格形式をとる場合、その文法的意味がかなり近づくことが窺える。

3353 ?okinawa{zeno:/n'e/n'o:/jeno:} {middasan/mindasan} k'açinu ?an.

### 2. 3. 9 katçi 格

移動の到着点をあらわす。同様の用法が en 格にもみられる(2.3.5の(7))。

0251 da: {hate:katçi/hate:n'i} {?ikijo:/?ikinja}. 「おまえが畑へ行け。」

0353 ?i:, hate:katçe: wannu ?ika. 「うん、畑へはおれがいく。」

3753 zisano: kanmakara ?umikatçi ju tunn'a ?izan. 「じいさんは朝から海へ魚をとり

いった。」

上の用例 0251 では **n'i** 格も現れている。その他に<到着点>の **n'i** 格の用例はみられないのだが、訳文を「畑に」などのようにすれば、多くの用例が現れるだろう。

### 2. 3. 10 tu 格

(1)相互的な動作のあいてをあらわす。

5951 **ɕi:ro:ja ?uttunu saburo:tu ɕittɕit'an(do:)**. 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」

7051 **mittɕi:e gakkō:nu ɕinɕe:{tu/e} o:t'an(do:)**. 「道で学校の先生に会った。」(道で学校の先生と会った。)

(2)相互的な関係がなりたつ、一方の対象をあらわす。

5153 **kameŋ n'inbidaki nariba ?inŋa:ja guru:tu {jinmun/?issu} ʒa**. 「食べてねるだけならいぬやねことおなじだ。」

7251 **kazukonu muntu t'itumun assa:(o:ba) hanakoemu ho:e: kuririjo:**. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」(和子のものとおなじげた(を)花子にもかってやろう。)

### 2. 3. 11 kara 格

(1)移動の出発点や動作や状態の開始時点など、コトガラの起点をあらわす。

2453 **magō: ?itu to:k'o:kara mudurikka**. 「孫はいつ東京から帰るか。」

2353 **magō:nu ?udukara to:k'o:jen ?un**. 「孫が去年から東京にいる。」

3751 **?azi:ja k'anmakara {?umikatɕi/?umɕe:} j'u:o:ba tunja ?izando:**. 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

(2)原料をあらわす用法も見られた。材料などを表す **sen** 格、**en** 格との使い分けについてのさらなる調査が必要である。

4451 **ɕe:ja ɕumikara tukurindo:**. 「酒は米からつくる。」

(3)1例だが、動作にかかわる場所(以下の用例では通り過ぎる場所)をあらわす用例もみられた。**kara** 格のこの用法は琉球語全体に見られるものであり、上嘉鉄方言にも保たれていることがわかる。

1351 **mitɕinu mannakakara: ?attɕiba ?ikando:**. 「道のまんなかをあるいてはいけない。」(道のまんなかからあるいてはいけない。)

### 2. 3. 1 2 **madi** 格

動作や状態のおよぶ範囲をあらわす。なお、用例 2753 は複合連体格の例である。

3053 **ziro, ?un n'imoto: ja:madi hann'ijen izenkuri.** 「次郎、この荷物を家までかついで行ってくれ。」

2851 **jozimate: jekje: matço:rijo:.** 「四時までで駅でまっておれ。」(四時までは駅でまっておれ。 \*made:<madi+ -ja)

2753 **?o:sakakara to:k'o:madinu kisačino: sansakaja:.** 「大阪から東京までの汽車賃はいくらだろうか。」

### 2. 3. 1 3 **madin'i:**格

動作がそのときよりもまえに成立する、あるいは成立したことをあらわす。**madi** 格でも現れているが、いずれも用例が少ないため、さらなる調査が必要である。

2951 **gozimadin'i: muduranba narando:.** 「5時までに帰らなくてはならない。」

cf. 2953 **gozimadi muduranba naran.** 「5時までに帰らなくてはならない。」

### 2. 3. 1 4 格の周辺 (あるいは周辺の格)

ここでは、現代日本語共通語の「-より」、引用の「-と」に対応する形式を挙げる。

#### 2. 3. 1 4. 1 -jurimu/-jukkamu

比較の基準をあらわす。

1751 **kiju: çu:juri hadinu {?tçusari/?tçusatando:}.** 「きのうは今日より風が強かった。」

3951 **{j<sup>2</sup>ujukamu/j<sup>2</sup>ujurimu} n'ikunu {ho:nu/ho:ŋa} takaçando:.** 「魚より肉のほうが高い」(魚よりも肉のほうが高い。)

#### 2. 3. 1 4. 2 -ten

話や考えの内容をあらわす。

3553 **hakonu nakajeno: manzu:nu {?ik<sup>2</sup>ut<sup>2</sup>u/sansa} ?anten ?umi:rijo.** 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

## 2. 4 中里

中里方言には以下の 11 の格形式と 2 つの周辺の形式がみとめられる。

### 2. 4. 1 **ŋa** 格

(1)述語のさししめす動作、変化、状態の主体をあらわす。このとき、**ŋa** 格名詞は従属節にも現れることができる (6873、3171)。

- 1871 {çiruduri:ŋa/maççiru: tuiŋa} tinto:(oba) {tuduija:/tuduso:ja:}. 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」
- 1573 ?a, ?amiŋa φutittçi:. 「あ、雨が降ってきた。」
- 5371 φudu ?itukuŋa tçu:gakko:nu çinse:n'i nat'ando:. 「去年いとこが中学の先生になった。」
- 1971 ?an jaman'je: inuçiçiŋa ?un nessuija:. 「あの山にはいのししがいるそうだ。」
- 6873 ?isaŋa kuritan kusui numiba no:juro:. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」
- 3171 n'i:ŋa ?ubussatankara t'aizi muttçando:. 「荷物が重かったので、二人でもった。」

また、いわゆる<総記>の用法もみとめられる。

- 0271 daŋa hate:gatçi ?iki. 「おまえが畑へ行け。」
- 0373 ?in, hate:gatçe: waŋa ?itçui. 「うん、畑へはおれが行く。」
- 0671 dinŋa da: hasajo:. 「どれがおまえの笠だ。」
- 0771 ?un hasaŋa wa: mundza. 「その傘がおれのだ。」

(2)感情や能力の対象をあらわす。なお、この方言では **ba** 格の用例はあらわれなかった。

- 3471 maŋa:ja k'açiŋa sutçundo:. 「孫はお菓子が好きだ。」
- 4071 wano: to:nu saçimiŋa {kanbusai(A)/kanbusaja:(B)}. 「おれは蛸のさしみが食べた<sub>い</sub>。」
- 5473 ?ituko: je:gonu honŋa jun'unsui. 「いとこは英語の本が読める。」

## 2. 4. 2 nu 格

(1)あとに続く名詞句を修飾する連体修飾語となり、その属性や関係するものをあらわす。なお上嘉鉄を除く他の方言と同じく、**nu** 格をとる名詞(句)は1人称、2人称代名詞を除き(2.4.3 参照)制限されていない。

- 1672 ?itokonu hutunŋa janinu i:n'i hutçan do:. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」
- 5973 çïro:ja ?uttunu saburo:tu çittçiti. 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」
- 4171 da:(ja) ?un ?iju:nu na: çittçun{ja/n'a}. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」
- 3571 hakun na:n'je: manzu:ŋa sansa ?antçi ?umujuijo. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」
- 7073 mitçizi gakko:nu çinse:n'i ?o:t'i. 「道で学校の先生に会った。」

また中里方言の **nu** 格も「NP1-nu NP2」で用いられるのが基本であるが、現代日本共通

語の形式名詞的な「の」に相当する用法も少なからず現れている (cf.)。以下の用例では ( ) に例文の逐語訳を記す。

0572 ?un hama: taru:nu mun na. 「この鎌は太郎のか。」(その鎌は太郎の鎌か。)

0973 ?ure: ?uttu:nu munkamu wakara:. 「それはおとうとのものかもしれない。」(それはおとうとのものかもしれない。)

6373 ?un çinbuno: su:nu mun do:. çin'u:nu muno:. ?uri do: 「その新聞はきょうのだ。昨日のものはこれだ。」(その新聞は今日のものだ。昨日のものはそれだ。)

cf. 0571 ?un hama: {taru:nu {na/ka}/taru:suna/taru:nu munna}. 「この鎌は太郎のか。」

0973 ?ure: ?uttu:nu kamu wakara: 「それはおとうとのものかもしれない。」

6371 ?un çinbuno: su:nuda, kin'u:nu muno: ?uriça. 「その新聞はきょうのだ。昨日のものはこれだ。」

(2)主節主語となる。中里方言の  $\eta a$  格と  $nu$  格も、主格と属格としての役割分化がかなり進んでおり、主節主語としての  $-nu$  の出現は、志戸桶方言に見られたものと同じ、感嘆形(波線部)などとの呼応に限られるようである(1472、cf.1471)。だが同時に  $\eta a$  格と感嘆形とのくみあわせも現れており(cf.1473)、主語となる  $nu$  格の用法はほぼ失われている。

1472 mitçinu çirusa ja:. 「道が広いなあ。」

cf. 1471 mitçina çirusaija:. 「道が広いなあ。」

1473 mitçina çirusa ja:. 「道が広いなあ。」

従属節主語では  $-nu$  も少なからず現れている。だがこれらの  $-nu$  は訳文の「の」に対応して用いられているにすぎず、やはり、主格用法における  $\eta a$  との使い分けは失われている。

2272 ?an mi:nu ?ubisan çirunu çirusan ?inçaja taru{jo/kai}. 「あの目のおおきい、色の白い男はだれだろう。」

6473 ?aminu hujun he: {?anma/?ani:}ja ja:zi terebibe: mitçui. 「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

## 2. 4. 3 Ø 格

(1)述語のさししめす動作の直接的な対象をあらわす。同様の用法が 2.4.4 の  $jo:ba$  格にもみとめられ、Ø 格とともに用いられている。

6873 ?isaça kuritan kusui numiba no:juro:. 「医者がくれたくすりをめばなおるだろう。」

6273 wano: çin'u:ja çinbun jumanti. 「おれはきのうは新聞をよまなかった。」

3771 ?azi:ja k'amakara {?um'je:/?umigatçi} çiju tuinja ?izan. 「じいさんは朝から海へ魚をとりに いった。」

3672 mago:ja mandzu: ha:daki kan<sup>j</sup>ui. 「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

7171 nu: ho:jukka. 「なにを買おうか。」

ŋa 格とゆれてはいるが、感情の対象をあらわす Ø 格形式の用例もみられた。

4073 wano: to:nu {saçimŋa/saçimidu/saçimi} kanbusa(i). 「おれは蛸のさしみが食べた  
い。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。(1)の直接対象と同じく jo:ba 格にも同様の用法がみとめられ、ともに用いられている。

1373 mitçin manna: ?attçe: ?ikan do:. 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

(3)人称代名詞のうち、1人称代名詞、2人称代名詞(単数)は連体修飾語となるのに、nu 格ではなく Ø 格形式をとる。また、連体修飾語となる nu 格の場合と同じく、Ø 格でも形式名詞的な「の」に相当する用法はみとめられていない(0771、0873 \*( )は例文の逐語訳)。

0473 wa: ke:ja za:n<sup>j</sup>idu ?aru. 「おれの鍬はどこにある。」

0771 ?un hasaŋa wa: munça. 「その傘がおれのだ。」(その傘がおれのもの(だ)。)

4673 wanna: ?azi:ja se:mu tabakumu numa: 「うちのじいさんは酒もたばこものまない。」

0671 diŋa da: hasajo:. 「どれがおまえの笠だ。」

0873 ?un huruçike: da: mun na. 「そのふろしきはおまえのか。」(そのふろしきはおまえのものか。)

Ø 格形式をとって連体修飾語になるヒト固有名詞(人名)の用例も見られた。志戸桶方言場合と同じく、用例が1例のみ、また3人称代名詞の用例はないため、今後さらなる調査が必要である。

7271 {kazukonutu/kazuko assa:tu} {jin mun/t<sup>2</sup>itu ?assa:}o:ba hanakon<sup>j</sup>imu ho:ti {tura so:/kuriro:}. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」({和子のと/和子げたと}おなじ{もの/げた}を花子にもかってやろう。)

また、話者によっては Ø 格ではなく nu 格が用いられることもあるようである。

cf. 0472 wannu k<sup>2</sup>e:ja ça:ni {?assu jo:/?akkai}. 「おれの鍬はどこにある。」

#### 2. 4. 4 jo:ba 格<sup>28</sup>

(1)述語のさしめず動作の直接的な対象をあらわす。

3671 maŋa:ja mandzu:o:ba ha:dakidu kan<sup>j</sup>ui. 「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

- 7273 kazukonu muntu titu geta(jo:ba) hanakon<sup>j</sup>imu ho:ti turaso:. 「和子のおなじげたを花子にもかってやろう。」
- 5873 uto: de:zi kagujo:ba {t<sup>2</sup>ukuti/t<sup>2</sup>ukutan}. 「夫は竹でかごをつくった。」
- 6773 hanako: ?okkann<sup>i</sup> gohanjo:ba kamatçei mura(t)t<sup>i</sup>. 「花子がかあさんにごはんをたべさせてもらった。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。直接対象の用法と同じく、この用法でも Ø 格のほうが優勢のようである。

- 1873 maççiru: tuiņa sorajo:ba tudui. 「真っ白な鳥が空を飛んでいる。」
- 1273 çiko:zo: nariba ?UN mitçijo:ba ?iki jo:. 「空港ならこっちの道を行きなさい。」
- 1371 mitçinu manna:(o:ba) ?attçei: ?ikan(do:). 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

## 2. 4. 5 n<sup>i</sup> 格

(1)動作のあいてや基準など、間接的な対象をあらわす。

- 7073 mitçizi gakkono:nu çinse:n<sup>i</sup> ?o:t<sup>i</sup>. 「道で学校の先生に会った。」
- 5671 ?UN hanasçie: tuzin<sup>i</sup>ibe:i tçikatça(N). 「その話は妻にだけ聞かせた。」
- 3873 ?uma: ?umin<sup>i</sup> tçikasangara ?ijuņa masai. 「ここは海にちかいので魚がうまい。」
- 7471 hanako: t<sup>2</sup>uraņa ?okkann<sup>i</sup> ju: n<sup>i</sup>tçuija:. 「花子は顔がかあさんによく似ている。」

うけみ文や使役文で、動作の主体も n<sup>i</sup> 格であらわされる。

- 5771 tuzin<sup>i</sup> ji:(o:ba) t<sup>2</sup>ukurasui. 「妻に夕飯を作らせる。」
- 6073 saburo:ja çiro:n<sup>i</sup> butto:zi ?utatti. 「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

(2)動作や状態のかかわるところ、動作や状態がなりたつときをあらわす。

- 1671 ?itukunu ?uduņa ?iançira:n<sup>i</sup> {çutçei ?ai/çutçai}. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」
- 2373 mago:ņa hudukara to:k<sup>2</sup>o:n<sup>i</sup> ?ui. 「孫が去年から東京にいる。」
- 3572 hakun na:n<sup>i</sup> manççu:ņa ?ikutu ?antçei ?umujukko. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」
- 1173 çiko:ke: çittçei:n<sup>i</sup> ?ikkaiçika ne:. 「飛行機は一日に一回しかない。」
- 2571 hatçigatsun<sup>i</sup>ie: muduti sun nessuija:. 「八月には帰ってくるようだ。」

(3)変化の結果をあらわす

- 5371 çudu ?itukuņa tçu:gakkono:nu çinse:n<sup>i</sup> nat<sup>2</sup>ando:.. 「中学校の先生になった。」

なお、中里方言の-ni も移動動作の目的をあらわすのには用いられない。

cf. 3771 ?azi:ja k<sup>2</sup>amakara {?um<sup>1</sup>je:/?umigatçi} ?iju tuinja ?izan. 「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」

6973 ?okkano: ?itçibagatçi çina ho:inn<sup>1</sup>a ?izi. 「かあさんは市場へ買い物に行った。」(かあさんは市場へ品買いに行った。)

## 2. 4. 6 zi 格<sup>29</sup>

(1)道具、手段をあらわす。

1073 ?okina:{n<sup>1</sup>e:/gatçi} hun<sup>1</sup>izi ?itçukkamu çiko:kizi ?izan ho:ŋa juta(s)sai. 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

3171 n<sup>1</sup>i:ŋa ?ubussatankara t<sup>2</sup>ai<sup>1</sup>zi muttçando:. 「荷物が重かったので、二人でもった。」

3273 ?UN ?uwage: n<sup>1</sup>anma ?okina:zi n<sup>1</sup>isenenzi ho:ti. 「この上着はこのまえ沖縄で二千円で買った。」

(2)材料や原料などの構成要素をあらわす。

5871 uto: de:zi so:çink<sup>2</sup>a:(o) t<sup>2</sup>ukut<sup>2</sup>an. 「夫は竹でかごをつくった。」

(3)うごきや状態がなりたつ場所をあらわす (場所名詞)。

2871 jozimadi jekizi mattçurijo:. 「四時まで駅でまっておれ。」

7073 mitçi<sup>1</sup>zi gakkono:nu çinse:n<sup>1</sup>i ?o:t<sup>2</sup>i. 「道で学校の先生に会った。」

3273 ?UN ?uwage: n<sup>1</sup>anma ?okina:zi n<sup>1</sup>isenenzi ho:ti. 「この上着はこのまえ沖縄で二千円で買った。」

(4)原因をあらわす。他の方言と同じく、名詞 jamai (病気) の zi 格と、動詞 jamjui (病む) の中止形が現れている(cf.6671)。

6673 hanako: tçin<sup>1</sup>u:kara jamaizi nittui. 「花子はきのうから病気でねている。」

cf. 6671 hanako: tçin<sup>1</sup>u:kara jadi nittui. 「花子はきのうから病気でねている。」(花子はきのうから病んでねている。)

## 2. 4. 7 gatçi 格

移動の到着点をあらわす。

0271 daŋa hate:gatçi ?iki. 「おまえが畑へ行け。」

3773 ?azi:ja k<sup>2</sup>amakkara ?umigatçi ?iju {tuinn<sup>1</sup>a/tunn<sup>1</sup>a} {?izan/?izi}. 「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」

#### 2. 4. 8 tu 格

(1)相互的な動作のあいてをあらわす。

5971 **ɕi:ro: ?uttunu saburo:tu ɕittɕit<sup>2</sup>a(n).**「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」

(2)相互的な関係がなりたつ、一方の対象をあらわす。

5171 **kadi nittun dakinariba: ?inŋa:ja guru:tu {?issu/t<sup>2</sup>itu}za:**「食べてねるだけなら いぬやねことおなじだ。」

7273 **kazukonu mun<sup>2</sup>tu titu geta(jo:ba) hanakon<sup>1</sup>imu ho:ti turaso:**「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」(和子のものとおなじげた(を)花子にもかってやろう。)

#### 2. 4. 9 kara 格

(1)移動の出発点や動作や状態の開始時点など、コトガラの起点をあらわす。

2471 **maŋa:ja itu to:k<sup>1</sup>o:kara {mudujukka/mudujusujo:}**「孫はいつ東京から帰るか。」

2372 **mago:ŋa hudukara to:kjo:ni ?ui.**「孫が去年から東京にいる。」

3771 **?azi:ja k<sup>2</sup>amakara {?um<sup>1</sup>je:/?umigatɕi} ?iju tɕin<sup>1</sup>ja ?izan.**「じいさんは朝から海へ魚をとり いった。」

(2)原料をあらわす。ただし話者によっては **zi** 格が用いられており(cf.4471)、英語の **of** と **from**、現代日本語共通語の **デ**格と **カラ**格に見られるような使い分けはないようである。

4473 **se:ja ɕumikara t<sup>2</sup>ukujusu do:**「酒は米からつくる。」

cf. 4471 **se:ja ɕumizi {t<sup>2</sup>ukujui(A)/t<sup>2</sup>ukujusudo:(B)}**。「酒は米からつくる。」

#### 2. 4. 10 madi 格

動作や状態のおよぶ範囲をあらわす。なお、用例 2772 は複合連体格の例である。

3073 **ɕi:ro:, ?un n<sup>1</sup>imutsu jo:ba ja:madi hatamiti ?izikuri.**「次郎、この荷物を家までかっいで行ってくれ。」

2871 **jozimadi jekizi mattɕurijo:**「四時まで駅でまっておれ。」

2772 **?o:sakakara to:k<sup>1</sup>o:madinu kiɕatɕino: sansakai.**「大阪から東京までの汽車賃はいくらだろうか。」

#### 2. 4. 11 madin<sup>1</sup>i 格

動作がそのときよりもまえに成立する、あるいは成立したことをあらわす。

2971 **gozimadin<sup>1</sup>je: muduranba: narando:**「5時までに帰らなくてはならない。」(5時までは戻らなければならないよ。)

#### 2. 4. 12 格の周辺 (あるいは周辺の格)

ここでは、現代日本語共通語の「-より」、引用の「-と」に対応する形式を挙げる。

#### 2. 4. 1 2. 1 -kkamu

比較の基準をあらわす。

1773  $\text{t̚in}^{\text{h}}\text{u}:\text{ja}$   $\text{su}:\text{kkamu}$   $\text{hadi}\eta$   $\text{t̚usatti}$ . 「きのうは今日より風が強かった。」(きのうは今日よりも風が強かった。)

3971  $\text{?ijju}:\text{kkamu}$   $\text{nikunu}$   $\text{ho}:\eta$   $\text{ta}:\text{sai}$ . 「魚より肉のほうが高い」(魚よりも肉のほうが高い。)

1072  $\text{?okina}:\text{gat}\eta$ : { $\text{huni/humi}$ } $\text{t̚i}$   $\text{?it̚ukkamu}$   $\text{çiko}:\text{kid}\eta$   $\text{?id}\eta$   $\text{ho}:\eta$   $\text{jutasari}$ . 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

#### 2. 4. 1 2. 2 -t̚i

話や考えの内容をあらわす。

3571  $\text{hakun}$   $\text{na}:\text{n}^{\text{h}}\eta$ :  $\text{manzu}:\eta$   $\text{sansa}$   $\text{?ant̚i}$   $\text{?umujujo}$ . 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

### 2. 5 荒木

荒木方言には以下の 11 の格形式と 2 つの周辺的な形式がみとめられる。

#### 2. 5. 1 $\eta$ 格

(1) 述語のさししめす動作、変化、状態の主体をあらわす。このとき、 $\eta$  格名詞は従属節にも現れることができる (6892、3191)。

1892 { $\text{çiru}/\text{maççirunu}$ }  $\text{tur}\eta$   $\text{tinto}$ : { $\text{tudu}\bar{i}/\text{tudun do}$ :}. 「真っ白なとりが空を飛んでいる。」

1591  $\text{?age}$ :  $\text{?ami}\eta$   $\text{f̥utitt}\eta$ :. 「あ、雨が降ってきた。」

5392  $\text{huzu}$   $\text{?ituku}\eta$   $\text{t̚u}:\eta$   $\text{akko}:\text{nu}$   $\text{çin}\eta$ : $\text{n}^{\text{h}}$   $\text{natan do}$ :. 「去年いとこが中学の先生になった。」

1991  $\text{?an}$   $\text{jaman}^{\text{h}}\eta$ :  $\text{?inuçiči}\eta$   $\text{?unti}:\text{sa}$ . 「あの山にはいのししがいるそうだ。」

6892  $\text{?içana}$   $\text{kuritan}$   $\text{kusuri}$   $\text{numiba}:\text{no}:\text{rundaro}$ :. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」

3191  $\text{n}^{\text{h}}\eta$   $\text{?ubussatankann}^{\text{h}}$   $\text{t}^{\text{h}}\text{arizi}$  { $\text{mutt}\eta/\text{mutt}\eta$ ando:}. 「荷物が重かったので、二人でもった。」

また、いわゆる<総記>の用法もみとめられる。

- 0291 daŋa hate:katçi iki. 「おまえが畑へ行け。」  
0391 ?in, hate:çje: waŋa ?itçui. 「うん、畑へはおれが行く。」  
0692 dinŋa da: hasa jo:. 「どれがおまえの笠だ。」  
0792 ?un hasaŋa wa: mun do:. 「その傘がおれのだ。」

(2)感情や能力の対象をあらわす。

- 3492 maŋa:ja k<sup>2</sup>açina suki do:. 「孫はお菓子が好きだ。」  
4093 wano: to:nu sacimiŋa kanbusai. 「おれは蛸のさしみが食べたい。」  
5493 ?ituko: je:gonu {honŋa jumi:su/hondu {jumi:/jumi: sui}}. 「いここは英語の本が読める。」

## 2. 5. 2 nu 格

(1)あとに続く名詞句を修飾する連体修飾語となり、その属性や関係するものをあらわす。上嘉鉄を除く他の方言と同じく、nu 格をとる名詞(句)は1人称、2人称代名詞を除き(2.5.3参照)制限されていない。

- 1691 ?itukunu ?udu jançira:n<sup>i</sup> çutçi ?ai. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」  
5993 çairo:ja ?uttunu saburo:tu çittçiti. 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」  
4193 da: ?un junu namae çittçunn<sup>a</sup>. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」  
3592 h<sup>w</sup>akun nakan<sup>i</sup> manzu:ŋa ?ikutsu ?antçi ?uma:inn<sup>a</sup>. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」  
7092 mitçizi gakko:nu çinçe:n<sup>i</sup> ?o:tando:. 「道で学校の先生に会った。」

また荒木方言の nu 格も「NP1-nu NP2」で用いられるのが基本であり、現代日本共通語の形式名詞的な「の」に相当する用法は今回の調査ではみとめられなかった。以下の用例では( )に例文の逐語訳を記す。

- 0591 ?un hama: taro:nu munna. 「この鎌は太郎のか。」(その鎌は太郎のもののか。)  
0991 ?ure: ?uttu:nu mun<sup>2</sup>kamu {wakaran/çiriran/çirira:}. 「それはおとうとのものかもしれない。」(それはおとうとのものかもわからない。)  
6392 ?un çinbunno: su:nu mun<sup>2</sup>do: çin<sup>i</sup>u:nu mun<sup>2</sup>o: ?uri do:. 「その新聞はきょうのものだ。昨日のものはこれだ。」(その新聞は今日のものだ。昨日のものはそれだ。)

(2)主節主語となる。荒木方言の ŋa 格と nu 格も主格と属格としての役割分化がかなり進んでいるとみられ、主節主語としての -nu の出現は、感嘆形(波線部)などとの呼応に限られるようである(1491)。

- 1491 mitçin<sup>a</sup> çirusaija:./mitçinu çirusaja:. 「道が広いなあ。」

従属節主語では、主節主語よりも **-nu** が出やすい。だが、訳文が「(雨)の」となっているにもかかわらず **ŋa** 格が用いられている用例も現れており (cf.6492)、**nu** 格の主格としての用法はやはり衰退していると言える。

2291 ʔan mi:nu uɸusan irunu ɕirusan jinŋa: tarukai. 「あの目のおおきい、色の白い男はだれだろう。」

6493 ʔaminu ɸurun he: ʔanmaja ja:zi terebiba:ri mitɕui. 「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

cf. 6492 ʔamiŋa hurun ɕi:ja ʔanmaja ja:zi terebibakkai mitsun do:. 「雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。」

### 2. 5. 3 Ø 格

(1)他の方言と異なり、荒木方言の Ø 格には、述語のさししめず動作、変化、状態の主体をあらわすという主格としての用法が積極的にみとめられる。例えば 1691 と同じ訳文の他の話者による例文でも、「布団が」に相当する部分は Ø 格で現れている(「データ集」の 1692 参照)。なお、0292 はいわゆる<総記>の用法である。

1492 ʔun mitɕi ɕirukamuja:. 「道が広いなあ。」

1691 ʔitukunu ʔudu jaŋɕira:nʔi ɸutɕi ʔai. 「いとこの布団がやねの上にほしてある。」

0292 da: hate:kanʔi ʔiki. 「おまえが畑へ行け。」

(2)述語のさししめず動作の直接的な対象をあらわす。

6892 ʔiɕaŋa kuritan kusuri numiba: no:rundaro:. 「医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。」

3791 ʔazi:ja kʔamakara ʔumikanʔi jʔu turinja {ʔizi/ʔizando:}. 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

3692 maŋa:ja manzu: kawadaki kamin do:. 「孫はまんじゅうを皮だけ食べる。」

5892 uto: de:zi kaqu tsukutan do:. 「夫は竹でかごをつくった。」

7293 kazukonu muntu titsu munnu ʔassa hanakonʔimu ho:ti kuriro:. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」

7192 nu: ho:o:ka. 「なにを買おうか。」

また、感情の対象をあらわす用法もみられた。

3491 maŋo:ja {kʔwaɕiŋa suki/kʔwaɕi sutɕun}do:. 「孫はお菓子が好きだ。」

5492 ʔituko: jeigonu hon juminsun do:. 「いところは英語の本が読める。」

(3)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。(2)の直接対象の用法とともに、2.5.4の *jo:ba* 格に同様の用法がみとめられるが、いずれの用法においても、それを実現する主な形式は  $\emptyset$  格である。

1291 *ku:ko: nariba* {*?un/φun*} *mitçi* ?*ikijo:*. 「空港ならこっちの道を行きなさい。」

1392 *mitçinu manna:* ?*akkiba* ?*ikan do:*. 「道のまんなかをあるいてはいけない。」

1891 {*çirusan t<sup>2</sup>uriņa/çiruduriņa*} *tinto:* *tudui*. 「真っ白な鳥が空を飛んでいる。」

(4)人称代名詞のうち1人称、2人称代名詞の単数形は<sup>30</sup>、連体修飾語となるのに  $\emptyset$  格形式をとる。また、連体修飾語となる *nu* 格と同じく、 $\emptyset$  格でも形式名詞的な「の」に相当する用法はみとめられていない(0792、0892 \*() は例文の逐語訳)。

0491 *wa: k<sup>2</sup>we:ja* *ɖa:n<sup>2</sup>i* {*an/ai*}. 「おれの鋏はどこにある。」

0792 ?*un kasa: wa: mundo:*. 「その傘がおれのだ。」(その傘がおれのもの(だ)。)

0691 *diruņa da:* {*kasa/hasa*}. 「どれがおまえの筥だ。」

0892 ?*un ?utsukki:ja da: munna:*. 「そのふろしきはおまえのか。」(そのふろしきはおまえのものか。)

$\emptyset$  格形式をとって連体修飾語になるヒト固有名詞(人名)の用例も見られた。やはり3人称代名詞の用例がないため、さらなる調査が求められる。

0592 ?*un hama: taro: munna:*. 「この鎌は太郎のか。」(その鎌は太郎ものか。)

## 2. 5. 4 *jo:ba* 格<sup>31</sup>

(1)述語のさししめず動作の直接的な対象をあらわす。

5893 ?*uto: de:zi kaqujo:ba tsukut<sup>(?)</sup>i*. 「夫は竹でかごをつくった。」

5793 *tuzin<sup>2</sup>i ji: {jo:ba/wo:ba}* {*tsukuraçi/tsukurasui*}. 「妻に夕飯を作らせる。」

2.5.3で述べたように荒木方言の直接対象をあらわす主要な格形式は  $\emptyset$  格であり、上の2つの用例にも、「かごを」「夕飯を」の部分が  $\emptyset$  格形式となっている同じ訳文からの用例が現れている。つまり *jo:ba* 格は、直接対象の用法においていわば2次的な形式だと言える。以下に示すように、*-jo:ba* の形をとらない用例が少なからず現れていることから、それは明らかである。

cf. 4191 *da: ?un j<sup>2</sup>unu namaeba* *çittçunja*. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」

3091 *ɖiro:, ?un n<sup>2</sup>imutsuo ja:madi hatamiti* {*?izi kuriri/muçi ?izi kuriri*}. 「次郎、この荷物を家までかついで行ってくれ。」

6893 ?*isaņa kuritan kusurio* *numiba* {*no:run ɖaro:/no:ruso: aranka (ja:)*}. 「医者がかく

れたくすりをのめばなおるだろう。」

6292 wano: tɕin<sup>ɲ</sup>u:ja ɕinbunno: jumantan do:.「おれはきのうは新聞をよまなかった。」

(2)動作のかかわる場所をあらわす(場所名詞)。この用法も主に Ø 格であらわれる。

1391 mitɕinu manna:(oba) ʔattɕe: ʔikan.「道のまんなかをあるいてはいけない。」

## 2. 5. 5 n<sup>ɲ</sup>i 格

(1)動作のあいてや基準など、間接的な対象をあらわす。

7093 mitɕizi gakkono: ɕinse:n<sup>ɲ</sup>i ʔo:ti.「道で学校の先生に会った。」

5692 ʔun hanaɕe: tuzin<sup>ɲ</sup>idaki {tɕikatɕan/hanatɕan} do:.「その話は妻にだけ聞かせた。」

3893 ʔuma:ja ʔumin<sup>ɲ</sup>i tɕikasankaran<sup>ɲ</sup>i juŋa {masai/masari}.「ここは海にちかいので魚がうまい。」

7492 hanako: tsuraŋa ʔanman<sup>ɲ</sup>i ju n<sup>ɲ</sup>itsun do:.「花子は顔がかあさんによく似ている。」

うけみ文や使役文で、動作の主体も n<sup>ɲ</sup>i 格であらわされる。

5792 tuzin<sup>ɲ</sup>i ji:ja tsukurusun do:.「妻に夕飯を作らせる。」

6093 saburo:ja ɕiɾo:n<sup>ɲ</sup>i butto:zi ʔutatti.「三郎は次郎に棒でなぐられた。」

(2)動作や状態のかかわるところ、動作や状態がなりたつときをあらわす。

1691 ʔitukunu ʔudu janɕira:n<sup>ɲ</sup>i ɸutɕi ʔai.「いとこの布団がやねの上にほしてある。」

2391 maŋo:ŋa ɸuzukara to:k<sup>ɲ</sup>o:n<sup>ɲ</sup>i ui.「孫が去年から東京にいる。」

3591 hakunu {naka/na:}n<sup>ɲ</sup>i manɕu:ŋa ʔikutsu ʔantɕi ʔumuɲja.「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

1192 ɕiko:kija ɕittɕi:n<sup>ɲ</sup>i ʔikkaiɕika {ne:ran/tuban}do:.「飛行機は一日に一回しかない。」

2591 hatɕiqatsun<sup>ɲ</sup>ie muduti sunti:do:.「八月には帰ってくるようだ。」

(3)変化の結果をあらわす

5392 huzu ʔitukuŋa tɕu:ŋakko:nu ɕinɕe:n<sup>ɲ</sup>i natan do:.「中学校の先生になった。」

なお、荒木方言の-n<sup>ɲ</sup>i も移動動作の目的をあらわすのには用いられない。

cf. 3792 ʔazi:ja k<sup>(?)</sup>anmakara ʔumizi ju {tunn<sup>ɲ</sup>a/turi:n<sup>ɲ</sup>a} ʔizan do:.「じいさんは朝から海へ魚をとりにいった。」

6993 ʔokkanno: {ʔitɕiba/miɕija}n<sup>ɲ</sup>i mun ho:inn<sup>ɲ</sup>a ʔizi.「かあさんは市場へ買い物に行った。」(かあさんは市場にものの買いに行った。)

## 2. 5. 6 zi 格

(1) 道具、手段をあらわす。

1092 ʔokina: kan<sup>1</sup>e: hunizi ʔizan jurimu çiko:kizi ʔizan ho:ŋa jutasan do:. 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

3191 n<sup>1</sup>i:ŋa ʔubussatankann<sup>1</sup>i t<sup>2</sup>arizi {mutç*i*/mutçando:}. 「荷物が重かったので、二人もった。」

3292 ʔUN ʔuwaŋe: n<sup>1</sup>anma ʔokina:zi n<sup>1</sup>içenenzi {ho:tan/ho:tasu} do:. 「この上着はこのまえ沖縄で二千元で買った。」

(2) 材料や原料などの構成要素をあらわす。

5892 uto: de:zi kagu tsukutan do:. 「夫は竹でかごをつくった。」

(3) うごきや状態がなりたつ場所をあらわす (場所名詞)。

2891 jozimadi jekizi mattçuri(jo):. 「四時まで駅でまっておれ。」

7092 mitçizi gakkono:nu çinçe:n<sup>1</sup>i ʔo:tando:. 「道で学校の先生に会った。」

3291 ʔUN ʔuwaŋe: ʔune:da ʔokinawazi n<sup>1</sup>içenenzi {ho:tasudo:/ho:tando:}. 「この上着はこのまえ沖縄で二千元で買った。」

また以下の例では、「行った」ではなく「魚をとり」にかかるかたちで、動きをなりたつ場所をあらわす zi 格があらわれている。

3792 ʔazi:ja k<sup>(?)</sup>anmakara ʔumizi ju {tunn<sup>1</sup>a/turi:n<sup>1</sup>a} ʔizan do:. 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」(じいさんは朝から海で魚とりに行ったよ。)

(4) 原因をあらわす。今回の調査では名詞 bjo:ki (病気) の zi 格の用例のみ確認され、動詞 jamjui (病む) の中止形の用例は現れなかった。

6692 hanako: tçin<sup>1</sup>u:kara bjo:kizi nittun do:. 「花子はきのうから病気でねている。」

## 2. 5. 7 kan<sup>1</sup>i 格<sup>32</sup>

移動の到着点をあらわす。また、移動の目的あらわされている用例もみられた(6992)。

3791 ʔazi:ja k<sup>2</sup>amakara ʔumikan<sup>1</sup>i j<sup>2</sup>u turinja {ʔizi/ʔizando:}. 「じいさんは朝から海へ魚をとりに行った。」

0292 da: hate:kan<sup>1</sup>i ʔiki. 「おまえが畑へ行け。」

0392 ʔUN, hate:kan<sup>1</sup>e: waŋa ʔitsundo:. 「うん、畑へはおれがいく。」

6992 ʔanmaja ʔitçibakan<sup>1</sup>i {kaimunkan<sup>1</sup>i/ho:imun çin<sup>1</sup>a} ʔizan do:. 「かあさんは市場へ買い物に行った。」(かあさんは市場に{買い物へ/買い物しに}行った。)

### 2. 5. 8 tu 格

(1)相互的な動作のあいてをあらわす。

5992 **ziro:ja ?uttunu saburo:tu ciŋciŋando:.** 「次郎はおとうとの三郎とけんかした。」

(2)相互的な関係がなりたつ、一方の対象をあらわす。

5192 **kadi ninbindaki nariba ?inŋ<sup>w</sup>aja guru:tu ?onnaŋi do:.** 「食べてねるだけなら いぬ  
やねことおなじだ。」

7292 **kazukonu muntu ?onnaŋi ?assa hanakon<sup>j</sup>imu ho:ti kuriro:.** 「和子のとおなじげたを  
花子にもかってやろう。」(和子のものとおなじげた花子にもかってやろう。)

### 2. 5. 9 kara 格

(1)移動の出発点や動作や状態の開始時点など、コトガラの起点をあらわす。

2491 **maŋo:ja ?itsu to:k'o:kara mudujusujo:.** 「孫はいつ東京から帰るか。」

2391 **maŋo:ŋa ?uzukara to:k'o:n<sup>i</sup> ui.** 「孫が去年から東京にいる。」

3793 **?azi:ja k<sup>2</sup>amakara ?umi:katçi ju tunn'a ?izi.** 「じいさんは朝から海へ魚をとり  
いった。」

(2)原料をあらわす。材料などをあらわす **zi** 格との使い分けについてはさらなる調査が  
求められる。

4492 **çe:ja humikara tsukurusudo:.** 「酒は米からつくる。」

### 2. 5. 10 madi 格

動作や状態のおよぶ範囲をあらわす。なお、用例 2791 は複合連体格の例である。

3092 **ziro:, ?un n<sup>i</sup>imotsuo ja:madi hatamiti ?izi kuri.** 「次郎、この荷物を家までかついで  
行ってくれ。」

2891 **jozimadi jekizi mattçuri(jo):.** 「四時まで駅でまっておれ。」

2791 **?o:sakakara to:k'o:madinu kiçatçinno: sansa bakkai {kai/ka:rukkai}.** 「大阪から東  
京までの汽車賃はいくらだろうか。」

### 2. 5. 11 madin<sup>i</sup> 格

動作がそのときよりもまえに成立する、あるいは成立したことをあらわす。

2991 **gozimadin<sup>i</sup> muduranba narando:.** 「5時までに帰らなくてはならない。」

### 2. 5. 12 格の周辺 (あるいは周辺の格)

ここでは、現代日本語共通語の「-より」、引用の「-と」に対応する形式を挙げる。

2. 5. 1 2. 1 -kamu/-juri(mu)

比較の基準をあらわす。2種類の形式が併用されているようである。

1792 t̥inu:ja {su:kamu/su:jurimu} haʒiŋa tsu:satan do:. 「きのうは今日より風が強かった。」(きのうは今日よりも風が強かった。)

3991 j̥ukamu n̥ikunu ho:ŋa {ta:sai/ta:sando:}. 「魚より肉のほうが高い」(魚よりも肉のほうが高い。)

1092 ʔokina: kan̥e: hunizi ʔiʒan jurimu ʧiko:kizi ʔiʒan ho:ŋa jutasan do:. 「沖繩には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

2. 5. 1 2. 2 -t̥i

話や考えの内容をあらわす。

3592 hʷakun nakan̥i manʒu:ŋa ʔikutsu ʔant̥i ʔuma:inn̥ja. 「箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。」

### 3 喜界島方言の格の体系

以上、喜界島の5つの方言の格形式について記述してきた。その体系を表に示す(次頁)。またそれぞれの格形式について、本報告における考察の結果は以下のようにまとめられる。

1. ŋa 格と nu 格について、上嘉鉄をのぞく4つの方言のいずれでも、主格と属格の役割分化が進んでいる。だが上嘉鉄方言では、主格、属格が nu 格に統合されつつあり、ŋa 格は衰退の傾向にある。
2. Ø 格について、荒木をのぞき、4つの方言におけるその用法の中心は直接対象をあらわすことであるが、同じく直接対象の用法をもつ jo:ba 格(-o:ba、-ba 含む)との関わりにおいて、いずれの形式が用いられやすいかに方言差がみとめられる。また荒木方言の Ø 格には、直接対象のほか動きの主体を表す用法が積極的にみとめられ、文法的意味の範囲が広い。
3. n̥i 格~kai 格(-kat̥i、-gat̥i、-kan̥i 含む)について、まず、小野津・志戸桶・中里・荒木の4つの方言でのそれぞれの格形式の用法はほとんど同じであった。上嘉鉄方言でも、n̥i 格、kat̥i 格の用法は他の4方言と同じである。

だが上嘉鉄方言の格体系には他とは大きく異なる点が2点みとめられる。まず、他の4方言では zi 格にまとめられている道具や手段をあらわす用法と動きのなりたつ場所をあらわす用法をもつ形式が、sen 格と zen 格に分化していること、そして、n̥i 格から

		小野津	志戸桶	上嘉鉄	中里	荒木	
主格		-ŋa	-ŋa	(-ŋa)	-ŋa	-ŋa	
属格(・主格)		-nu	-nu	-nu	-nu	-nu	
対格(・属格・主格)		-∅	-∅	-∅	-∅	-∅	
対格		-jo:ba	-ba	-o:ba	-jo:ba	-jo:ba	
与・処格		-nʲi	-nʲi	-en	-nʲi	-nʲi	
具格		-zi	-zi		-sen	-zi	-zi
処格					-zen		
方向格		-kai	-kai	-katçi	-gatçi	-kanʲi	
共格		-tu	-tu	-tu	-tu	-tu	
奪格		-kara	-kara	-kara	-kara	-kara	
範囲格		-gari/-madi	-madi	-madi	-madi	-madi	
限界格		-garinʲi/ -madinʲi	-madinʲi	-madinʲi:	-madinʲi	-madinʲi	
周辺の格 一格の周辺	比較	-jukka	-jukka(mu)	-jurimu/ -jukkamu	-jukkamu	-kamu/ -juri(mu)	
	引用	-tçi	-tçi	-ten	-tçi	-tçi	

[表：喜界島方言の格の体系]

katçi 格をすっぽりと覆ってしまう意味範囲を持つ、en 格の存在である。上嘉鉄方言は他の地域の人たちから「あそのユミタ（ことば）はほかとちがう」と言われることの多い方言であるが(まつもと 2011)、格体系のこれら2つの特徴も、その見方をうながす要因の1つと言えるだろう。

4. kara 格について、コトガラの起点をあらわす用法のほか、1例だが通り過ぎる場所をあらわす用例が見られた(2.3.11 上嘉鉄、用例 1351)。**-kara** のこの用法は広く琉球語全体にみとめられるものであり、他の方言についても確認する必要がある。
5. 範囲格、限界格について、小野津方言にのみ**-gari**、**-garinʲi** という形式があらわれた。**-madi**、**-madinʲi** との使い分けはみとめられず、これらの形よりも古い形式であると思われる。だが、話者に限らず多く用いられており、衰退の傾向にはない。
6. 周辺の格について(比較、引用)、現れる形式に多少の差が見られるものの、文法的機能においては全く同じであった。なお<引用>は上嘉鉄方言の**-ten** のみ異なっていて、目を引く。

このほか、今回の調査では明らかにしえなかった点も数多くある。その他の地域も含め、

喜界島方言のさらなる調査研究が求められる。

#### 参考文献

- 内間直仁 1978「喜界島志戸桶方言の文法」法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言』4:65-126  
国立国語研究所編 1963『沖縄語辞典』大蔵相印刷局  
白田理人・山田真寛・荻野千砂子・田窪行則「琉球語喜界島上嘉鉄方言の談話資料」大西  
正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』3:111-151  
高橋太郎他 2005『日本語の文法』ひつじ書房  
中本正智 1978「喜界島志戸桶方言の語彙」法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言』4:1-63  
まつもとひろたけ 2011「奄美喜界島方言のアリ・リ系のかたちをめぐって」(2011.5.22  
国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研  
究」(代表者・木部暢子)研究会(於神戸大学)における発表資料[未公開])

<sup>1</sup> 文法調査は、国立国語研究所 1968「「全国方言文法の対比的研究」調査IV調査票」の改訂版「「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」琉球方言用調査票」(琉球大学 狩俣研究室作成)を用いて行った。同調査票は格形式の調査を主眼とするものである。

<sup>2</sup> 軟口蓋破裂の[ga]でも観察されているが、ここでは[ŋa]に代表させる。以下他の地域においても同じ。

<sup>3</sup> 話者によっては jo:ba 格(対格)を用いるようである。

cf. 5413 ʔituko: jeigonu honjo:ba jumi dikʔui. 「いとは英語の本が読める。」

<sup>4</sup> 形式名詞的な -nu の用法も数例現れていた。以下の用例 6314 では、NP2 の名詞 (mun) が省略できるようである。

cf. 6314 ʔun ʕinbuno kʔu:nu (mun) {do:/ɕa}. {kinʔu:no:/kinʔu:nu munu:} ʔuri do:. 「その新聞はきょうのだ。きのうのはこれだ。」

7213 kazukonutu tʔitsu munnu getajo:ba hanakonʔimu ho:ti huriro:ka. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」

7214 kazukonutu tʔitsu ʔassa:jo:ba hanakonʔimu ho:ti {kuriro:/kuriranba ja:}. 「和子のとおなじげたを花子にもかってやろう。」

<sup>5</sup> 1人称・2人称代名詞の語幹および Ø 格としての扱いについては、同形の語形が用いられている志戸桶方言に準じている。注 14 参照。

<sup>6</sup> [joba]、[juba]などでも観察されているが、ここでは[jo:ba]に代表させる。なお、j の脱落した[oba]、[o:ba]も現れている。

<sup>7</sup> 口蓋化のない[ni]でも観察されているが、ここでは[nʔi]に代表させる。以下 madinʔi 格、他の地域においても同じ。

<sup>8</sup> -nʔi は助辞 -ja にとりたてられると、二重母音あるいは融合して[nʔe:]の形で現れる。

cf. 3313 ʔokina:nʔe: mittasanu kʔaʕinu ʔai. 「沖縄にはめずらしい菓子がある。」

<sup>9</sup> 破擦音[ɕil]でも観察されているが、ここでは[zil]に代表させる。

<sup>10</sup> いわゆるとりたてにも、-gari と -madi の両方の形式が現れている。

- cf. 6511 juwe:n dukin<sup>1</sup>ie: ?anma:gari ?udutando:. 「お祝いのときにはばあさんまでおどった。」
- 6512 ju:wë:nu {tukini/tuke:} ?anmamadı {udutan/?udutan} do:. 「お祝いのときにはばあさんまでおどった。」
- 11 話者によっては ba 格 (対格) が用いられるようである。なお小野津方言でも、同訳文の用例で対格相当形式が現れていた(注 3 参照)
- cf. 5433 ?ituko: jeigonu honba jum<sup>1</sup>u: sun. 「いここは英語の本が読める。」
- 12 形式名詞的な用法の文が 1 例確認されたが、-nu ではなく -no で現れていることから共通語訳に引きずられたものと考えられる。
- cf. 0932 ?ure: ?uttu:no kamu {çirera:/çirira:}.(C) 「それはおとうとのかもしれない。」
- 13 同様の記述が内間 1978 でもなされている(p113)。
- 14 単数の 1 人称代名詞について、(1)で挙げた用例 0331 などから、その語幹は wa と想定される。また複数についても内間 1978 では wanna の形が報告されている。よって連体修飾語となる wa:、wanna:は、∅ 格ではなく、これらの語幹に何らかの助辞が融合して長音化した形式とも捉えられる。だが、da:の形が報告されている単数の 2 人称代名詞語幹に da の形とのゆれがみとめられること(上述の用例 0232、4133 など。内間 1978 でも「あなたは」に相当する形式に da:ja、daja の両方が現れている)、また石垣方言の場合とは異なり、志戸桶方言では-ŋa の[ŋ]の脱落が規則的なものとは言えないことなどから、本報告では便宜的に wa:、wanna:、da:を wa、wanna、da の変わり語幹と捉え、それぞれこの ∅ 格の項で扱う。
- 15 また、ba 格ではなく助辞-ja の後接した形式も多く現れている。
- cf. 4133 daja ?un ?ijunu na:ja çittçunn<sup>1</sup>a. 「おまえはこの魚の名まえを知っているか。」
- 5833 uto: de:zi kago: {tsutta/tsuttçan}. 「夫は竹でかごをつくった。」(kagu+ -ja)
- 3031 çïro:, ?un n<sup>1</sup>imutsuo: ja:madi hatamiti ?izi kuri. 「次郎、この荷物を家までかついで行ってくれ。」(n<sup>1</sup>imutsu+ -ja)
- 16 -n<sup>1</sup>i は助辞-ja にとりたてられると、二重母音あるいは融合して[n<sup>1</sup>e:], [ne:]の形で現れる。
- cf. 3332 ?okinawan<sup>1</sup>e: mittasan k<sup>w</sup>açiŋa ?ai. 「沖縄にはめずらしい菓子がある。」
- 6531 ju:we:nu tukine: ?anma:madi {udut<sup>2</sup>ando:/udut<sup>2</sup>i}. 「お祝いのときにはばあさんまでおどった。」
- 17 注 9 に同じ。
- 18 2 人称単数の用例も現れていた。志戸桶方言などと同じく(注 14 参照)、da:を da の変わり語幹と捉えるならば、以下は ∅ 格の用例となる。
- cf. 0253 da: hate:katçi {?iki/?iki}. 「おまえが畑へ行け。」
- 19 ∅ 格で現れている用例もみられた。
- cf. 5452 ?ituko: e:gonu sumutu jumi: {çin/çin}do:. 「いここは英語の本が読める。」(いここは英語の本読めるよ。)
- 20 -du は古典日本語の「ぞ」に対応する助辞。
- 21 [jo:ba]、[oba]でも観察されているが、ここでは[o:ba]に代表させる。
- 22 また志戸桶方言と同じく(注 15 参照)、jo:ba 格ではなく助辞-ja の後接した形式もみられた。
- cf. 3051 çïro: çun n<sup>1</sup>imutu: ja:madi hatamie: {?ize: kuri/mutçe:çen kuri}. 「次郎、この荷物を家までかついで行ってくれ。」(n<sup>1</sup>imutsu+ -ja)
- 5853 ?u(t)to: de:sen kago: {t<sup>2</sup>ukkatçan/t<sup>2</sup>ukutan}. 「夫は竹でかごをつくった。」(kagu

+ -ja)

23 [e:], [jen]などでも観察されているが、ここでは[en]に代表させる。

24 以下の用例では、間接対象の **nʲi** 格などではなく、おそらく現代共通語の「ところ」に相当する形式名詞とのくみあわせが現れている。

cf. 2651 ʔanma:ja ʔatɕa to:kʰo:katɕi jinnankʰannari ʔo:i:ja ʔi{tɕ/k}indo:. 「かあさんはあした東京へむすこに会いに行く。」(かあさんはあした東京へむすこのところに会いに行く(よ)。\*「データ集」2653も同じ)

25 以下の用例は、一見、移動動作の目的をあらわす **-nʲi** の用例のように思われるが、その語幹名詞が現代日本語共通語からの借用であり、単なる類推によるものと言ってよいだろう。

cf. 6953 ka:tɕano: miɕijakatɕi kaimononʲi ʔiʒan. 「かあさんは市場へ買い物に行った。」

26 [ɕe:], [hen], [he:]などでも観察されているが、ここでは[sen]に代表させる。

27 なお、sen 格以外の形式で道具・手段の意味があらわされている用例がみられたが、以下の用例の前者は訳文、後者は他の方言からの類推による一時的な使用だと考える。

cf. 3253 ʔun ʔuwage: nanma:ta ʔokinawazen nʲisenenzen ko:tan. 「この上着はこのまえ沖縄で二千元で買った。」

1053 ʔokinawakatɕe: hunʲizi ʔitɕukkamu ɕiko:kizi ʔiʒan ho:nu jutasari. 「沖縄には船で行くより飛行機で行ったほうがいい。」

28 [o:ba]も観察されているが、ここでは[jo:ba]に代表させる。

29 注9に同じ。

30 訳文46「うちのじいさんは酒もたばこものまない。」の用例では、1人称単数あるいは「家の」に対応する形式のみが現れ、1人称複数形については確認できなかった(「データ集」4692、4693参照)。

31 注28に同じ。

32 **-kanʲi** の他、以下のような形式も現れた。荒木方言など、周辺方言からの影響か。

cf. 0291 daŋa hate:katɕi iki. 「おまえが畑へ行け。」

0391 ʔin, hate:tɕie: waŋa ʔitɕui. 「うん、畑へはおれがいく。」